

# 第 63 回国際学生会議

The 63<sup>rd</sup> International Student Conference

## 事業報告書

総合テーマ

～ Endeavors in Diversity ～







# 目次

第1章	国際学生会議	...p.3
	実行委員長挨拶	...p.4
	開催目的	...p.5
	国際学生会議の沿革	...p.6
第2章	第63回国際学生会議	...p.7
	概要	...p.8
	総合テーマ	...p.10
	日程	...p.11
	プログラム全体の流れ	...p.12
	参加者名簿	...p.14
	スタッフ名簿	...p.16
第3章	事前研修旅行	...p.18
	事前研修旅行統括	...p.19
	各支部事前研修旅行報告	...p.20
第4章	本会議	...p.35
	全体統括	...p.36
	分科会統括	...p.37
	分科会報告 TC+参加者より	...p.38
	各プログラム報告	...p.79
	本年度の新たな取組	...p.83
第5章	感想	...p.85
	石田寛様からのフィードバック	...p.86
	(経済人コー円卓会議日本委員会 専務理事兼事務局長)	
第6章	協賛・後援	...p.88

# 第 1 章 国際学生会議

実行委員長挨拶

開催目的

国際学生会議の沿革

# 実行委員長挨拶

拝啓

時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

この度、2017年8月16日から同月28日の13日間にかけて第63回国際学生会議を開催いたしました。開催にあたりましては多くの個人法人の皆様から多大なるご指導ご協力をいただきましたことを感謝申し上げます。

本年度は「Endeavors in Diversity」という総合テーマのもと様々な国際交流企画や研究活動を行ってまいりました。弊団体過去最高にも匹敵する19カ国から集まった58名の学生は、お互いの差異を発見し、理解し、時に衝突をしつつ、目標達成への突破口を模索するというプロセスを13日間の間、寝食を共にしながら繰り返しました。これは想像以上に過酷な経験です。どんなにつらい問題に直面したとしても、その場から逃避することは許されません。開催期間中に涙を流す学生も数名いたほどです。しかし、このようなグローバルな環境に身を置く体験は喜びでもあります。12日間の間に培われた対話能力や忍耐力、そして固い友情は、参加者の将来にとって多分に有益なものであると強く信じています。

本報告書では、私たちがこの期間中に何をし、何を考えていたかを紹介させていただきます。限られた紙面の中ではありますが、少しでも学生の思いを感じ取っていただければ幸いです。

第63回国際学生会議は、そのような学生の思いに共感してくださった多くの方々のご支援なしには成功を収めることができませんでした。改めて御礼申し上げます。

またこの報告書を作成している今現在、大いに熱意のある64期の実行委員がすでに活動を開始しております。多くの皆様方にこの国際学生会議の開催趣旨に引き続き賛同していただけること、そして弊会議がさらなる発展を遂げることを心より願ってやみません。

敬具

2017年9月吉日

第63回国際学生会議実行委員長

松本滉司

## 開催目的

国際学生会議（以下 ISC63）は、主催団体であります日本国際学生協会の団体理念「世界平和への貢献」に資するため、開催理念として「学生同士による国籍を超えた相互理解」と「多国籍な学生が集まる場で、より多様な考え方を創出し、文化の枠を超えた発見を導き出し、社会へ発信すること」の二点を掲げます。

毎年夏、日本に集まった世界各国の学生が、約 2 週間にわたって共同生活を送り、相互の価値観や嗜好、経験の違いに直面します。真剣な議論や対話、また日常の些細な会話を通じて認識した互いの差異を、衝突を乗り越えて合意を形成しようと試みるのが、参加者の文化的背景などの多様性を理解することにつながります。日常会話だけでなく、社会問題の議論というコミュニケーションの場を作り、多面的なコミュニケーションを密に繰り返すこと、これは、一般的な海外経験もしくは国際交流では得難い経験であり、また参加者同士の確固たる関係の礎となりましょう。本会議中に行った交流や対話から新たな思考や行動を得ることになる各参加者は、様々な国民や宗教が共存する現代世界の中で、多様性を尊重し、寛容さを備えた世界平和の担い手の 1 人となることを願ってやみません。

多様な国籍の学生が集まる中で、世界で起こっている様々な社会問題へアプローチし、解決策を投じていくこととなりました。この ISC63 においては、学生が世界を救う完璧な解決策を考えることよりも、議論を経て様々な文化的背景を持った者同士これまで認識してこなかった点、そこで見出された発見に重きを置きました。そのわずかなお互いの“違い”から創出される新たな考え方が世界を救う一歩を作ることとなるのではないのでしょうか。

そもそもこの学生会議は、満州事変後の日米関係悪化を憂慮した 4 人の学生によって開催された「日米学生会議」に端を発します。その後 1954 年に「国際学生会議」として再出発した後、半世紀以上この理念が受け継がれ日本の学生の国際精神の礎となってきました。私たちはこのよき精神をさらに次世代に受け継ぎ、社会に貢献する学生を育成します。そうして世界平和へ貢献することが国際学生会議の最大の目的であり、使命であることを常に心に留め時代に求められる学生団体となるべく常に変革を続けて行く所存ではないかと考えます。

## 国際学生会議の沿革

- 1934年 第1回日米学生会議（国際学生会議の前身）  
満州事変の発生をうけ「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下、青山学院大学にて開催。
- 1941年 日米開戦により会議は開催されず。
- 1947年 第8回日米学生会議  
戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、日本で開催。
- 1954年 第15回日米学生会議。  
アメリカで行われた会議を最後に日米学生会議は解消。
- 同年 第1回国際学生会議が初めて開催。12カ国から84名の外国人の参加。  
28日間にわたり、東京、関西、北海道、仙台で開催。
- 1968年 学生運動の影響で、日本国際学生協会の中央委員会が分裂。
- 1969年 国際学生会議は開催されず。
- 1970年 第16回国際学生会議。国際学生会議の再開。
- 1986年 第32回国際学生会議  
日本人参加者選抜制度を廃止。日本国際学生協会員への国際交流の場を広げる。
- 1991年 第37回国際学生会議  
帯広市との協力により市民の方との国際交流の体験を共にする。
- 1997年 第43回国際学生会議  
参加国数を16カ国に増やす。
- 1999年 第45回国際学生会議  
多岐にわたる分野からの専門家をお呼びして、議論する機会を設けることで社会との関連を深める。
- 2016年 第62回国際学生会議  
ファイナルフォーラムで国連食糧計画駐日代表(当時)アンダーソン氏による講演。
- 2017年 第63回国際学生会議  
初めて名古屋で事前研修旅行を開催(名古屋を加えた6都市)。国連開発計画(UNDP)から後援を受け、ファイナルフォーラムで国連開発計画駐日代表(当時)近藤哲生氏による基調講演を実施。参加国数を19カ国に増やす。



## 第 2 章 第 63 回国際学生会議

概要

総合テーマ

日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

実行委員名簿

## 概要

英語表記名	The 63rd International Student Conference (ISC63)
会期・場所	事前研修旅行 8月16日(水)～8月19日(土) (九州・岡山・神戸・京都・大阪・名古屋の各都市で開催) 本会議 8月20日(日)～8月28日(月) (国立オリンピック記念青少年総合センター@東京)
総合テーマ	「Endeavors in Diversity」
ねらい	様々な価値観、考えを認め合うことで相互理解を達成すると同時にその環境下で新しい発見を学生が目線で発見する。また各国を代表する学生がISCプログラムを通じて成長する。
分科会テーマ	Table 1 Feminization of Poverty ～貧困の女性化～ Table 2 Coexistence of Robots and Human Beings ～機械と人間のあり方～ Table 3 Climate Change ～気候変動～ Table 4 Reconsideration of Capitalism ～資本主義の再構する～ Table 5 International Relations in the Trump Era ～トランプ大統領時代の国際関係～
公用語	英語
内容	国際問題研究 / ディスカッション 日本文化体験 / フィールドトリップ 各種交流会 / 成果発表会 Final Forum

参加者人数	日本人学生 35 名（うち実行委員 15 名） 外国人学生 23 名（うち実行委員 2 名）	計 58 名
参加大学	国際教養大学、国際基督教大学、東京大学、東海大学、 青山学院大学、立教大学、神奈川県立保健福祉大、一橋大学 早稲田大学、慶応義塾大学、聖心女子大学、芝浦工業大学、 愛知淑徳大学、名古屋市外国語大学、大阪大学、関西大学、 京都大学、京都府立医科大学、神戸大学、徳島大学、 北九州市立大学、The university of Edinburgh	
参加国・地域	中国、台湾、ベトナム、マレーシア、インド、フィリピン、 インドネシア、バングラデシュ、モンゴル、ハンガリー、 ノルウェー、ブルガリア、ルーマニア、ロシア、ハイチ、 ブラジル、ニュージーランド、アメリカ	
主催	日本国際学生協会 The International Student Association of Japan (I.S.A)	

# 総合テーマ

## ～ Endeavors in Diversity ～

2017年初頭「アメリカ第一」を掲げるトランプ米大統領が年初に誕生しました。他にもイギリスのEU脱退国民投票や難民問題などを見るにつけ、保護主義的、一国主義的な風潮が登場し、「グローバル」「多様性」が困難に直面していると感じます。そのような世界情勢の中、私たち学生は国の利害対立を超えるトランスナショナルな立場から志を同じくして対話をすることができるただ一つのアクターです。未来に責任のある若者として、現在人類が直面する問題へ意識を共有し、どのような価値観を普遍として大切にすべきなのか、12日間真剣に考えました。

### 【分科会】

第63回ISCでは5つの分科会を設置し活動を行いました。また今年度初めて海外在住者をテーブルチーフに任命し、多様性の向上に努めました。国連が策定する「持続可能な開発目標(SDGs)」とディスカッショントピックを相互にリンクさせることにより、より深く問題を掘り下げました。

本会議前2ヶ月半の事前研究を英語力向上と議論への準備期間として、様々な活動を織り交ぜながら本会議に備えました。本会議中には昼夜意見交換を重ね、問題に対する理解を深めました。最終日のファイナルフォーラムではUNDP駐日代表の近藤哲生様からご講演と学生発表へのフィードバックをいただくことで、「ISCのその先」への展望を確立しました。

### 【国際交流】

日本全国6都市での事前研修旅行や本会議中の東京観光、文化体験などの国際交流を分科会と並ぶもう一つのISCの活動の軸とします。文化や技術、政策など、日本を学べる機会を設け日本を海外の学生に発信するとともに、参加者出身国への理解を深めます。「ソーラン節体験」など体を使った活動も取り入れ、楽しい日本体験を提供します。さらに、これらの活動を通じて世界や日本、そして私たち自身に対する気付きと自然発生的な意見の交換を促すことによって「真の国際理解」そして「国際人としての自覚」を醸成することを図ります。

以上の活動は一貫して総合テーマである「普遍的な価値観を再考する」ことを狙いとし、当たり前前に甘受している様々なことが実は大変奥深く、思考の価値があるものだという事に参加者に気付いてもらうためのものです。ISCは特に日本の参加者にとって貴重な国際交流体験になります。この事業が多く学生にとって世界に目を向けるきっかけとなり、将来のキャリアを考える一助になることを願っています。

## 日程

事前研修旅行			
8月16日(水)	名古屋・京都・大阪・神戸・岡山・九州 各地にて開催		
8月17日(木)			
8月18日(金)			
8月19日(土)			
本会議			
8月20日(日)	開会式 ウェルカムパーティー	国立オリンピック記念 青少年総合センター	
8月21日(月)	分科会1 分科会2 分科会3		
8月22日(火)	分科会4 ANA機内食工場見学 分科会5		
8月23日(水)	本会議研修旅行		東京・神奈川の各地
8月24日(木)	分科会6 オープンテーブル レクリエーション		
8月25日(金)	分科会7 分科会8 日本文化体験	国立オリンピック記念 青少年総合センター	
8月26日(土)	分科会9 分科会10 分科会11		
8月27日(日)	ファイナルフォーラム フェアウェルパーティー		
8月28日(月)	閉会式 解散		

## プログラム全体の流れ

**2016年9月《第62回国際学生会議終了・第63回実行委員会発足》**

**2016年11月《公式サイト刷新》**

**2017年3・4月《各地での説明会の開催》**

参加者の募集に先駆け、関東関西の8地域で説明会を実施しました。またメディアへの出演や各大学の協力により実現したメーリングリスト等での広報を行いました。

**2017年5月《「SDG s × Youth 知ろう。語ろう。見つけよう。」の開催》**

4か月の準備の末、UNDP様や学生団体共催のSDG s 啓発イベントを東新橋の電通ホールで開催いたしました。

**2017年5月《選考》**

過去最大となる国内210名海外55カ国87名の応募者の中から、国内20名国外25名を選抜するためにエッセイ、面接の二段階審査を行いました。国際学生会議を成長の場にしてほしいという思いから、英語能力ではなくモチベーションなどを加味し選抜を行いました。

**2017年6月3～4日《参加者招集会》**

日本人参加者は招集会を合宿形式で開催し顔合わせをしました。本会議を円滑に行うことを目的として、日本人参加者間の交流や興味分野の把握等を行いました。また、2日目の午前中には株式会社ガイアックス様と国際開発研究者協会様のご協力を得て、ディスカッションやプレゼンテーションに関するレクチャーをしていただきました。

**2017年6～8月《事前研究期間》**

本会議に備えて必要な英語力と知識を獲得するため、本年度は新たに事前研究期間という制度を設けました。招集会の期日を1か月前倒しにすることで事前準備の時間を伸ばすと同時に、様々な企画を行いました。勉強会は各テーブル2回行い、海外参加者ともインターネットを通じた交流や議論を行いました。また、各自研究成果としてエッセイの提出や、ガイアックス様、国際開発者協会様によるレクチャーを開催しました。

**2017年8月15日《海外参加者来日》**

実行委員は関西空港に宿泊し、来日した海外参加者を随時各地域（九州、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋）のホストファミリーの家へと送り出しました。

**2017年8月16～19日《事前研修旅行》**

日本各地6都市において、現地大学生とともに文化交流や観光、各所見学等を行いました。

**2017年8月20～28日《本会議》**

東京に集まった参加者は、寝食を共にしながら議論や文化交流を行いました。

## 参加者名簿

**Table1. Feminization of Poverty** ~貧困の女性化~

風間大地	東海大学	Japan
倉野愛弓	愛知淑徳大学	Japan
土橋美燈里	国際教養大学	Japan
山本翠蓮	青山学院大学	Japan
Huynh Minh Phuc	National Dong Hwa University	Vietnam
Rebeca Fonseca Santos	Pontificia Universidade Católica do Rio de Janeiro	Brazil
Brigitta Boka	University of Cologne	Hungary
Mendbayar Lkhaasuren	Konkuk University	Mongolia

**Table2. Coexistence of Robots and Human beings** ~機械と人間のあり方~

梅津陽奈	神奈川県立保健福祉大学	Japan
砂原佑香	立教大学	Japan
端山響	名古屋外国語大学	Japan
馬淵将明	東京大学	Japan
Ruxandra Ioana Florea	早稲田大学	Romania
Samia Shamim	Kyung Hee University	Bangladesh
Nguyen yhi Thinh	Foreign Trade University	Vietnam
Josandy Maha Putra	University Utara Malaysia	Indonesia



**Table3. Climate Change** ~気候変動~

稲田健汰	大阪大学	Japan
岡部晴人	東京大学	Japan
伏谷侑桂	徳島大学	Japan
松井晴香	The University of Edinburgh	Japan
Mirda Sylvia	University of Padjadjaran	Indonesia
Iselin Helloey	Victoria University of Wellington	Norway
Christian Anthony Ng	De La Salle University	Philippines
Morgan Watkins	Victoria University of Wellington	New Zealand

**Table4. Reconsidering Capitalism** ~資本主義を再考する~

大下美倫	一橋大学	Japan
佐藤彰	一橋大学	Japan
鎌田一帆	関西大学	Japan
王安棣	早稲田大学	Taiwan
Fahim Faisal	University of Dhaka	Bangladesh
Bachir Bastien	National Tsinghua University	Haiti
Emily Okabe	創価大学	U.S.A
Plamen Stoyanov	Erasmus University Rotterdam	Bulgaria
Rachel Faun	武蔵野大学	Malaysia

**Table5. International relationship in the Trump Era** ~トランプ大統領時代の国際関係~

大林知尋	国際基督教大学	Japan
洲脇祐太郎	京都府立医科大学	Japan
野坂匠	東京大学	Japan
三船大制	東京大学	Japan
Irdita Sarawati	University of Indonesia	Indonesia
Aleksandra Pordan	Tongji University	Russia
Boryana Saragerova	Sofia University St. Kliment Ohridski	Bulgaria
Natish Singh Bassi	Xavier University-Ateneo de Cagayan	India

## スタッフ名簿

### 第 63 回国際学生会議 (ISC63) 実行委員

実行委員長		松本滉司	東京大学 3 年
副実行委員長		高階空也	神戸大学大学院修士 1 年
財務	部長	久保田弾	慶應義塾大学 3 年
		猪飼奈々	京都大学 3 年
広報		浅間菜通子	聖心女子大学 3 年
国内渉外		藤澤明子	慶應義塾大学 2 年
国際渉外		蜂谷祐季	早稲田大学 2 年
企画	部長	山本昂亮	早稲田大学 4 年
		堺竜哉	早稲田大学 4 年
マネジメント	部長	齋藤嘉克	芝浦工業大学 3 年
		石田まゆ	聖心女子大学 3 年
テーブルチーフ	Table1	Alyssa Rances	Capitol University 3 年
	Table2	新美貴仁	京都大学 2 年
	Table3	Nguyen Dinh Van Anh	Law University of HCMC 4 年
	Table4	内田崇	東京大学 3 年
	Table5	張應晗	慶應義塾大学 2 年
撮影係		渡部紘貴	北九州市立大学 2 年
ST 担当		高階空也	(同上)

### 各支部事前研修旅行 (事前 ST) 実行委員長

九州事前 ST	石田和典	北九州市立大学 2 年
岡山事前 ST	中春乃	ノートルダム清心女子大学 2 年
神戸事前 ST	福田大地	甲南大学 2 年
京阪事前 ST	辻本雅	関西大学 3 年
名古屋事前 ST	加藤瑞彩	南山大学 3 年

## 日本国際学生協会 (I.S.A.) 中央役員

会長	新井綾乃	法政大学 4年
中央事務局長	土居夏帆	共立女子大学 4年
財務部長	倉野愛弓	愛知淑徳大学 3年
広報部長	丹原菜々子	岡山大学 3年
派遣部長	柴田紗衣佳	同志社大学 3年
企画部長	栗原拓也	関西大学 3年

## 日本国際学生協会 (I.S.A.) 各支部支部長

九州支部	御手洗日菜	北九州市立大学 2年
岡山支部	藤原実穂	ノートルダム清心女子大学 3年
神戸支部	川本航平	神戸大学 3年
京都支部	原田紗英	同志社大学 2年
大阪支部	新子未紗	関西大学 2年
名古屋支部	市川早紀	南山大学 2年
東京支部	齋藤嘉克	芝浦工業大学 3年

\*学年は 2017 年度

## 第 3 章 事前研修旅行

事前研修旅行総括

各支部事前研修旅行報告

# 事前研修旅行(ST) 総括

副実行委員長兼 ST 担当 高階空也

## 1. 事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会(以下 I.S.A.)のプログラムの一つである国際学生会議(以下 ISC)に参加する海外参加者を I.S.A.の各支部(九州、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋)に派遣し、I.S.A.会員からの事前研修旅行(以下事前 ST)参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部実行委員が企画し ISC 本会議前に行われるもので、今年は 8 月 16 日から 18 日にかけて行いました。目的は本会議前に海外参加者に日本文化に慣れてもらい、また国内参加者が I.S.A.会員や海外参加者と交流できる機会を設けることです。本年度は初めて名古屋での事前 ST も行いました。

## 2. 事前研修旅行意義

事前 ST の意義で最も重要なことは、ISC に参加する海外参加者が日本の文化・慣習に触れてから本会議に臨んでもらうことです。また本年は日本を「学ぶ」姿勢にも力を入れました。日本の文化芸能や企業の技術を知ってもらえる工場見学や文化体験を企画に必ず盛り込むことで、普通の観光ではできない観光を体験していただきました。

## 3. 総括

今年の事前研修旅行では、日本の技術、文化を知ってもらうことにも注力し、各支部が各支部でしか作れない企画を作りました。九州では世界でも有名な日本酒の酒蔵へ、岡山ではヤクルト工場、神戸ではプラネタリウム、京阪では伝統芸能の刺繍美術館、名古屋では世界に誇るトヨタの技術を知れる記念館へ、海外参加者が訪れました。会議前に日本を知ること、また国際交流意欲の高い日本人と密に関わることで、普通の観光では味わえない旅行ができたと思います。またこの期間海外参加者は日本人の家にホームステイをしていただきました。日本の暮らしを知る点でも貴重な体験であったことでしょう。3 日間を経たのち海外参加者は東京へ向かいますが 8 月 19 日の別れの時間では日本人ホストと海外参加者が別れを惜しみ涙することもありました。

また本年からの取り組みとして、名古屋でも事前 ST を行いました。これまでの前例がない分開催が困難ではありましたが、テーブル 2 に関わるトヨタや名古屋グルメをうまく企画に盛り込み第一回目にふさわしい好調な出だしでありました。

海外参加者に事前 ST の感想を尋ねると、誰に聞いても「最高」という声しか返ってきませんでした。各支部 ST 実行委員を誇りに思います。最後にはなりませんが、この事前 ST を開催するにあたり企画に携わった各支部実行委員長をはじめとする実行委員、参加して下さった I.S.A.会員の皆さま、協力して下さった全ての方々に感謝申し上げまして、私からの総括とさせていただきます。

## 九州 ST 統括

実行委員長 石田和典

九州 ST では、準備段階として情報共有が円滑にできていなかった部分があり、実行委員や参加者に対してうまく情報が伝わらなかった点がありました。また、仕事の分担がうまくできず時間を多く費やしてしまうことが多々あったので、仕事の割り振りを徹底すべきだったと思います。やらなければならない仕事が多く大変でしたが、九州 ST を楽しみにしている参加者の為に、九州の魅力、日本の魅力を感じてもらえるように、企画、運営に努力しました。

九州支部の事前 ST の初日はまず北九州市立大学でのオリエンテーションから始まりました。例年に比べて他支部からの参加者が多く、また九州支部内においても初対面の人が多く、最初は緊張した様子でしたが、5 人の明るい海外参加者のおかげもあり、ゲームを通して、徐々に仲良くなることができました。その結果、北九州市の観光地である門司港へ観光に行った際も、終始楽しく過ごすことができました。また、海外参加者がホストだけでなく、より多くの日本人とも関わるができるようグループ行動にしたことにより、例年よりも海外参加者との交流がしやすくなったと感じました。

2 日目では長崎県の壱岐へ訪れました。非常に長い移動時間でしたが、壱岐の海の広さ、美しさに疲れも忘れ海水浴を十分に満喫しました。また、夜にはバーベキュー、花火を通して全員が心をかよわせ夏の一時を楽しむことができました。

3 日目では酒造見学に行きました。日本の伝統的な蔵酒造に海外参加者だけでなく、日本人参加者も興味津々でした。最後には試飲の時間も設けて頂き、お土産を買う参加者も少なくありませんでした。お昼は壱岐の絶品の海鮮料理をいただきました。どの料理も非常に美味で、皆すぐに食事をたいらげてしまいました。最後はまるでゴリラにそっくりな「猿岩」と呼ばれる有名な観光スポットで記念写真を撮影して、九州 ST を終了しました。

企画運営を行うことが人生で初めてだったので、3 日間の九州 ST の運営を通じて、情報共有、仕事の分担、資料の作成など多くのことを学ぶことができました。今年の反省点などしっかり引き継ぎをして来年の ST はよりよいものにしてもらいたいです。

事前の準備不足、連絡不足で参加者の皆様にはご迷惑をおかけしましたが、十分に楽しんで頂けて非常に良かったです。これにて私からの総括とさせていただきます。

## 九州 ST 参加者からの声

北九州市立大学 1年 長尾友里加

今回、私は初めて九州 ST に参加させていただきました。私は、以前から国際交流に興味があり I.S.A.に入っているのも、国際交流が目的でした。この事前研修旅行では、気軽に外国人参加者と触れ合うことが出来て、とても良い経験となりました。今年の九州での事前 ST の参加者は、フィリピン・ベトナム・マレーシア・インドネシア・ハンガリーの 5 名と、37 名の国内参加者で行われました。

1 日目は、まず学校で自己紹介をした後、グループに分かれてゲームを通してアイスブレイクをしました。その後、みんなで門司港に移動し、グループごとで門司港を散策したり、それぞれで、昼ご飯やデザートを食べたりしました。天気にも恵まれ、参加者もみんな楽しい初日を過ごしていたようです。解散後は、海外参加者と国内参加者とカラオケに行ったり、ホストと一緒にディナーを食べたりと、ゆっくり過ごせて良かったです。2 日目は、みんなで長崎の壱岐に行きました。高速バスで天神まで行き、博多ふ頭に移動してそこから 2 時間フェリーで壱岐まで移動しました。フェリーでの移動中も、みんなでトランプやゲームをして楽しみながら、壱岐まであっという間につきました。宿に着いた後はビーチで遊びました。私たちは、女子の海外参加者と一緒に海辺で過ごしました。男子の海外参加者は、国内参加者と一緒に海で泳いだり、砂に埋めあったり仲良くなっていました。夕ご飯は外でバーベキューをしました。お肉や野菜のほかに、日本食である焼きそばも作りました。ほとんどの海外参加者が、初めて食べる焼きそばだったようで満足していた様子でした。夕食後は、みんなでビーチに移動して、花火をしました。海外参加者にとっては、手持ちの花火は珍しく、日本の花火をととても楽しんでくれました。特に、打ち上げ花火は、「面白かった！」という声が聞くことができました。その後は、みんなでお酒を飲んだり、お菓子を食べたりしました。もちろん、お酒を飲めない参加者がいたので、女子の参加者と女子の国内参加者の何人かとお菓子を食べながらガールズトークをして、万国共通の恋愛の話などで、一気にみんなの距離が縮まりました。3 日目は、壱岐の酒造を見学し、壱岐の観光名所の 1 つである猿岩を見に行き、そこで記念写真を撮りました。この日も天気にも恵まれ、忘れられない記念となりました。お昼は壱岐の名物である海鮮丼を食べ、福岡に帰りました。解散後、海外参加者たちとご飯を食べに行き、最後の最後まで楽しかったです。次の日のお見送りでは、みんな寂しがっていて少し別れが悲しかったです。

最後に、この 3 日間は、本当に最高の 3 日間でした。ヨーロッパやアジアの色々な国からの参加者と過ごして、真の異文化交流を体験することができました。私自身、この事前研修の実行委員として活動して、たくさんの気づきや発見を得ることが出来、良かったです。このような素晴らしい機会を与えてくれた、国際学生会議の事前 ST 担当者様、事前 ST で出会えた方々、本当にありがとうございました。来年も、ぜひ参加したいと思います。

<日程>

8月16日：北九州市立大学でのオリエンテーション、門司港観光

8月17日：長崎県壱岐での海水浴、バーベキュー、花火

8月18日：酒造見学、海鮮料理、「猿岩」での記念撮影





## 岡山 ST 総括

実行委員長 中春乃

今年の岡山 ST には、Vietnam、Norway、Haiti、Brazil からの海外参加者さんと日本人 14 名の計 27 名の参加者を招いて行われました。以下、「事前準備」「本番」「感想」を事業報告書とします。

**事前準備：**今年は『岡山じゃけんできること』というテーマのもと岡山の特徴である自然豊かなところや、歴史的な建造物が多くあるところ、岡山の特産物などの要素を入れることを意識して国内外問わず参加者が楽しめるように、参加してよかったと思える企画を考えていきました。また、実行委員同士の情報共有を心がけスムーズに行えるようにしました。

**本番：**1 日目はウェルカムパーティーで自己紹介やアイスブレイクを行い皆の壁をなくすことが出来ました。また、閑谷学校で自然の中で歴史を学びました。2 日目はまず、ヤクルト工場に行き現代の技術を知り、勝山では人の温かさに触れることが出来ました。3 日目はけん玉、コマ、折り紙などの体験や後楽園に赴き日本文化を堪能しました。そしてフェアウェルパーティーでは 3 日間のムービーを鑑賞したり外国人参加者へアルバムを贈ったりとその場にいた全ての人が感動を共有しました。

**感想：**日が経つにつれて参加者の仲が深くなっていくのを感じ、輪を広げる場にすることができたと思います。上手く会話が出来なくても笑顔や一緒に過ごした時間により心を通わせることができ、国や言語の壁を感じさせませんでした。「岡山に来てよかった」という参加者の言葉はとても嬉しく、上記で述べた企画を行う上で意識したことが達成できたように感じられました。

最後になりますが、3 日間という短い期間にもかかわらずこんなにも充実した日々を過ごせたのは、岡山 ST を支えてくれた実行委員、一緒に濃い思い出を作ってくれた参加者の方々、海外参加者の受け入れを引き受けてくれたホストの方々、その他企画でお世話になった方々のお力添えのおかげです。ご支援ご協力ありがとうございました。

## 岡山 ST 参加者からの声

ノートルダム清心女子大学 3 年 三宅希実

この度、私は岡山 ST に 8/16～18 日の三日間、参加者として参加させていただきました。一年の時に実行委員、二年の時に実行委員長を務めさせていただいたため、実質三度目の事前研修旅行であり、初めての参加者側というわくわくと、後輩達を見守る視点からのある種の緊張感を胸に抱いておりました。しかし、実際に参加してみると、その心配は無用であったことをすぐに実感しました。実行委員同士の綿密な情報伝達、トラブルへの迅速な対応、個々の積極性や、英語運用能力等々、どれも私の想像を遥かに超えるもので、それらを土台に築き上げられた岡山 ST は目を見張るほど充実したものでした。

これら実行委員のサポートのおかげで海外参加者の方々とも沢山コミュニケーションを取ることができ、様々な意見を交わす中で『国内でも綿密な異文化交流ができる』という事前 ST の醍醐味を実感することができました。とりわけ、とある海外参加者さんが驚いていた『日本人は時間に本当に正確ね』『時間に正確だから私たちは退屈することなく岡山を満喫することができたわ』という言葉はとても印象に残っています。タイムスケジュールを組むこと、その通りに動くことの難しさは自分も良く知っているつもりで、その努力が参加者の方に快適さをもって伝わっていること、“日本人”への良い印象となっていることに胸が熱くなりました。事前 ST を通して、他の文化・習慣を知り、自分の文化・習慣も見直すきっかけとなりました。

また、行く先々で用意されていたミッションゲームにより退屈することなく、岡山で暮らす私でもあまり行かないような、しかし日本らしい開催場所の数々は、県外県内・国内外を問わず、全ての参加者にとって大満足なものでした。

最後になりましたが、長期にわたり岡山 ST の準備をしてくださった実行委員の皆さま、ISC のご担当者様、また、この度の事前 ST に関わって下さったすべての方に、心よりお礼申し上げます。素敵な経験をありがとうございました。

<日程>

8月16日：ウェルカムパーティー、衆楽館、閑谷学校

8月17日：ヤクルト工場、勝山

8月18日：日本文化体験、後楽園、フェアウェルパーティー



# 神戸 ST 総括

実行委員長 福田大地

2017年8月16日～18日の3日間、国際学生会議(ISC)の事前研修旅行として開催しました。今年、バングラデシュ・ブルガリア・フィリピン(1日目のみ参加)・ベトナムから4名の外国人が来てくれました。そして、日本人19人(神戸支部12人、岡山支部3人、ISC参加者4人)の計23人の参加者に恵まれました。

1日目では、明石市に赴きまずアイスブレイクかつ日本の伝統を知ってもらうために、けん玉、ジェスチャーゲーム、折り紙、福笑いなどを行いました。初めは緊張して笑いが少なかったりするものですが、この企画を通して緊張がほぐれたのではないかと思います。その後、日本の時間を定める統計135°が通っている明石天文科学館に行きプラネタリウム鑑賞をしました。その後海で自由行動。がっつり泳ぐ人もいれば、靴だけ脱いでという人もいました。

2日目では、六甲山に行きました。六甲山では、景色を楽しむのとアスレチック施設に行きました。山の中に40種類ものアスレチックがあり、みんなでアスレチックを楽しみましたが、意外にハードで他にアスレチックをしていたのは子供たちだけでした。童心にかえることができ良かったのではないかと思います。この日は、バスとケーブルと山上バスを用いたため、タイトなスケジュールでしたが当日の様子から時間を臨機応変に調整し、18時からのアフターに間に合わせることができ、夜ご飯をみんなで楽しみました。

3日目では、神戸どうぶつ王国といった動物との近さ・触れ合いに重きを置いた屋内型の動物園に行きました。これは外国人参加者・日本人参加者の両方から好評で、大きな肉食の鳥が目の前で飛ぶようなイベントなどが開催されており、この動物園だけでしか味わうことができない体験をすることができたのではないかと思います。その後は、神戸へと向かいミッションゲームを行いました。ミッションゲームの本気度は班で様々でしたが、ミッションゲームを取り入れたことによって自然と写真を撮る機会が増えたため、良い思い出となったのではないのでしょうか。しかし、この日はお金の関係でミッションゲームのための企画費をST参加費に含めることができず、少し不満の声もありました。特に海外参加者には負担となってしまいました。

最終日は神戸STのキャッチフレーズである、「BE KOBE」のモニュメントの目の前で集合写真を撮ることができました。神戸にイメージであるオシャレなどを感じることができ、海と山の近さや神戸の自然も感じられた、濃い3日間でした。神戸を存分に楽しみ、知ることのできた3日間になったのではないかと思います。

ここまで計画し支えてくれた実行委員の6人、温かく見守ってくれた参加者の方々、ホストの方々、その他STを支えてくれたISCの方々などには感謝しかありません。本当にありがとうございました。

## 神戸 ST 参加者からの声

神戸女学院大学 2 年 山下乃愛

今回私は初めて神戸 ST に参加させていただきました。以前から国際交流に興味があったので、この事前 ST は気軽に外国人の方々と接することができて、とても良い経験になりました。今年の海外参加者はフィリピン・ベトナム・バングラデシュ・ブルガリアの 4 名と、22 名の国内参加者で行われました。人数も比較的少なく、3 日間毎回グループが違ったので、参加者全体で仲良くなれて、濃い時間を過ごすことができました。

1 日目は、まず日本の遊びを通してアイスブレイクをし、明石市立天文科学館で展示物やプラネタリウムを見て、最後に舞子の海に行きました。海での時間が短くて少し残念だったという声があったので、最初のタイムスケジュール通りに事が進めていたらよかったなあと思います。

2 日目は、六甲山でご飯を食べたり、アスレチックをしたりしました。想像以上にハードでしたが、みんなで協力したり励まし合ったりしながら 1 つのことを達成したことにより、一層仲が深めることができました。摩耶山からの神戸の絶景はとても感動しました。フェアウェルパーティーでは、参加者どうしで自分の国や地域について話ながら楽しく食事ができたと思います。

3 日目は、どうぶつ王国で様々な動物と触れ合い、その後ショッピングモールでミッションゲームをしました。ミッションの種類も多くて楽しかったです。しかし、ほとんど班行動で、外国人がいない班は国際交流があまりできなかったということが残念でした。最終日だからこそ参加者全員でできる何かがあったらよかったなあと思います。

私のお気に入りには 3 日間で撮った 3 枚の集合写真です。1 日目は海と明石海峡大橋と、2 日目は山からの神戸の景色と、3 日目は BE KOBE のオブジェと。神戸 ST の良さは、海も山も神戸らしさも全て堪能できることだと感じました。最後になりますが、3 日間最高でした。密な交流や活動ができたこと、新たな発見や視点を与えてくれたこの事前 ST に感謝します。一生の思い出にします。長い間準備や運営に携わってくださった実行委員や国際学生会議の事前研修旅行担当者様、事前 ST で出会えた方々、本当にありがとうございました。またぜひ参加させていただきます。

<日程>

8月16日：アイスブレイク・明石天文科学館・アジュール舞子

8月17日：六甲山ガーデンテラス・アスレチック・Dinner Party

8月18日：神戸どうぶつ王国・ミッションゲーム



## 京阪 ST（大阪・京都合同） 統括

実行委員長 辻本雅

今年は大阪支部、京阪支部合同で京阪 ST として開催しました。今回はアメリカ、ブルガリア、インドネシア、ロシアから4名の海外参加者が参加してくれました。また、今回の海外参加者が全員女性ということもあり、海外参加者同士で固まる傾向が見られたのが少し残念でした。

1 日目はカラオケでウェルカムパーティーを行い、八つ橋工房に行きました。ウェルカムパーティーではアイスブレイクとして英語ビンゴを行いました。多くの人と交流できるようなルールを作り、たくさんの人と自己紹介や簡単な会話をすることができたと思います。また、八つ橋工房では八つ橋を作りました。作り方の説明はすべて日本語で行われるので、国内参加者は海外参加者に英語で作り方を教える必要があり、わいわいしながら八つ橋作りを楽しんでいるようでした。

2 日目は京都のミッションゲームを行いました。去年の京都 ST では四条のミッションゲームを徒歩で行い、参加者が疲れ果てていたとの声をきき、バスカードを事前に配布し、行いました。ミッションの数が多かったので、疲れている参加者も見られましたが、徒歩よりも多くのお寺を訪れることができました。ただ、それぞれのバスの時刻表まで下見しておらず、集合場所までのバスの本数が少なく、集合時間を遅らせることになってしまったことがこの日の大きな反省点です。

3 日目は大阪観光を行いました。3 日目ということもあり、初日より積極的に海外参加者に話しかける人が増えたように思いました。特に6年4組という日本の小学校をコンセプトにした居酒屋で行ったフェアウェルパーティーは国内、海外参加者共に好評でした。海外参加者は、同じ料理を何度も注文し、「これは東京でも食べれる？」などど、よほど気に入った料理を見つけたようで嬉しかったです。

今回の事前 ST は大阪支部、京都支部の合同での開催になり、実行委員が集まりづらいなど大変なこともありました。新入生の参加が多く、他支部の ISA 会員と交流する場になったのではないかと思います。

事前 ST 期間中、本当に参加者が楽しんでいるのか不安でしたが、フェアウェルパーティーでは先導をきいてみんなの前でスピーチしてくれる海外参加者もいて、感謝の気持ちを述べてくれて、とても感動し思わず涙ぐんでしまいました。

終わってみるとお迎えからお見送りまで一瞬で、とても充実した5日間を送ることができました。頼りない実行委員長でしたが、支えてくれたみなさまのおかげで無事京阪 ST を終えることができました。今回の京阪 ST に関わっていただいたすべての方に感謝致します。本当にありがとうございました。

## 京阪 ST 参加者からの声

関西大学 3 年 筒井涼

僕は今回初めて事前 ST に参加しました。今回僕が事前 ST に参加するきっかけは、昨年事前 ST に参加した友人の話を聞き、「自分も外国人参加者と交流したい」と思い、参加を決意しました。また、京阪 ST では、日本の中でも特に人気の高い京都と大阪の二県を回れることがとても魅力的であり、参加する決め手となりました。

1 日目はウェルカムパーティーと生八つ橋作り体験をしました。ウェルカムパーティーはカラオケの大部屋で行ったため、ちょっとしたゲームや歌を歌うことができ、参加者全員が楽しみながら仲を深められたと思います。そして八つ橋作りでは、生地を作るところから始めました。八つ橋をお店で売っているように綺麗に作ることは難しかったですが、外国人参加者とも楽しんで作ることができました。

2 日目は京都でミッションゲームを行いました。初めにバスのフリーパスをもらい自分たちの行きたい場所にスムーズに行く事ができ、多くの場所に行くことができました。僕の班は清水寺、八坂神社や錦市場などを中心に巡りました。時間に余裕があったので、カフェでお茶をしたり、お店でお土産を買ったりと観光を満喫することができました。ミッションゲームの後はみんなで伏見稲荷大社に行きました。赤い鳥居が綺麗で参加者同士で写真を撮っていたのが印象に残っています。

3 日目は大阪城散策と難波観光をしました。難波では水上バスに乗り道頓堀でクルージングをしました。水上バスは水面に近く風を感じることができ、歩いている時とは違った景色が味わえました。この日の観光は基本的に自由行動であったため、好きなところで食べ歩きや観光ができて自由度の高いものでした。

大人数で観光・体験したこの 3 日間は個人での観光とは違い、多くの人との出会いと思い出を与えてくれるものでした。今回の事前 ST では、どのコンテンツにもみんなが楽しめるような工夫がされており、時間をかけて作って下さったことが伝わるプログラムでした。最後になりましたが、長い期間、準備運営に携わって下さった実行委員の皆さん、本当にありがとうございました。



<日程>

8月16日：ウェルカムパーティー、八つ橋作り、刺繍美術館

8月17日：京都でのミッションゲーム、伏見稲荷散策

8月18日：大阪城散策、道頓堀リバークルーズ、難波散策、フェアウェルパーティー



## 名古屋 ST 総括

実行委員長 加藤瑞彩

今回の名古屋 ST にはニュージーランド、モンゴル、バングラデシュから 3 名の海外参加者と実行委員 8 名を含む国内参加者 20 名の合計 23 名が参加をしました。今年は ISC 側の働き掛けもあり、非 ISA 会員である ISC 参加者も 3 名参加をしてくれました。

今回の名古屋 ST のテーマは「原点回帰～名古屋再発見～」でした。名古屋は観光資源に乏しく魅力がない都市と言われています。実際、実行委員自身もあまり名古屋に魅力を感じておらず、ST で訪れる観光地を探すことに苦労しました。そのような中で今回は「なごやめし」「犬山城」「トヨタ産業技術記念館」の 3 つを柱にし、名古屋 ST を作り上げました。なごやめしは全国的にもよく知られていますが、今回はただ食べるだけではなく料理企画にすることにより、会話の材料にもなりました。犬山城は江戸時代以前から天守がそのまま残っていて国宝にも指定されている非常に歴史のある城で、最近では城下町も話題になっています。そして、トヨタ産業技術記念館は今では世界的企業であるトヨタの自動車技術だけではなく、前身である紡績の技術についても学ぶことができます。今回参加してくれた海外参加者の中にも、この記念館への訪問を一番楽しみにしているという声を聴き、トヨタという企業の大きさを実感しました。

また、今回の名古屋 ST は全日を泊まりにしました。このことで必然的に参加者同士が一緒に過ごす時間を増やすことができ、結果として、3 日間という限られた時間の中で仲をより深めることにつながったのではないかと思います。ST では海外参加者とのコミュニケーションには必然的に英語を使用することが求められます。個人個人の英語のスキルに関しては様々ですが、日に日に頑張ってコミュニケーションを取ろうとする参加者や英語で頑張って説明しようとする実行委員の姿を見ることが増えてきたことがすごく印象に残っています。英語のスキルだけではなく、相手とコミュニケーションを取ろうとする気持ちが一番大切だと思いました。

昨年 12 月に名古屋支部が承認されて、今回が第一回目の名古屋 ST の開催となりました。実行委員長の自分を始め、実行委員も手探りの状態から ST を作りあげていきました。一回目ということもあり、特に縛られることなく自由に ST を作ることもできた半面、その分たくさん反省点もありました。これらの反省点も踏まえ来年以降はもっとより良い名古屋 ST を開催してほしいと思います。

個人的なことではありますが、ISC の本会議の Final Forum を見学しに行った際も、ST に参加してくれた海外参加者・日本人参加者に再会することができ、ST からできた繋がりを実感しました。今回の ST を通して、実行委員・参加者において新たな繋がりが生まれたら幸いです。

最後に、今回の名古屋 ST に参加してくれた参加者の皆さん、一緒に作り上げてくれた実行委員、名古屋 ST に関わってくれた全ての人に感謝をし私の総括とさせていただきます。

## 名古屋 ST 参加者からの声

関西大学 2 年 佐藤秀

今回の名古屋 ST に参加して自分はとても充実した国際交流をすることができました。まずなぜ今回私が名古屋 ST に参加したかという、他の ST が開催される地域は何回も行ったことがあり、名古屋は唯一あまり行ったことがなかったからという単純な理由でした。こんな単純な理由で参加した自分でも本当に濃く充実した 3 日間を送ることができました。そこで今回の名古屋 ST で特に印象に残ったことを綴ろうと思います。

まず 1 つ目は、アイスブレイクなどのオープニングイベントです。私は ST に参加しているメンバーでもともと知り合いだった人も少なく、始まった時点はメンバーと仲良くなれるかとても心配でした。しかしアイスブレイクやそれに続く料理企画などを通してメンバー全員と仲良くなることができ、緊張も和らぎ外国の方ともよりたくさん話すようになりました。

2 つ目に印象に残ったことは、犬山城とその城下町を外国人参加者の方とミッションゲームをしながら散策したことです。私自身犬山に行ったことがなくとても新鮮な体験でした。ミッションゲームの内容も私にとっては少し難しかったですが、外国人参加者などの班のメンバーと一緒に深く考えることもできとても楽しかったです。外国人の方と日本の観光地を散策すると普段はあまり気にもとめないようなものについて質問されます。自分自身日本のことでもまだまだ知らないことがたくさんあるのだなど、この ST に参加して実感したので、次に外国人の方に質問されたらしっかりと答えられるように日本について勉強しようと思いました。

3 つ目に印象に残ったことは、トヨタの産業博物館見学をしたことです。ここでは繊維から車までトヨタがどのようにしているような巨大な企業になったのが詳しく分かりとても興味ぶかかったです。繊維のコーナーでは博物館の方が全て説明してくださり、とても分かりやすかったです。名古屋 ST ならではの施設で、ST のなかにこの施設の見学があって本当によかったと個人的には思いました。

今回こんなにも充実した 3 日間を外国人の参加者と送ることができたのは、加藤瑞彩さんをはじめとする実行委員の方々の苦勞があつてのことだと思います。本当に心から感謝申し上げます。今回の名古屋 ST で多くの人と友達になれたうえ、とても充実した思い出を作ることができました。本当に充実した楽しい ST でした。ありがとうございました。

<日程>

8月16日：料理企画

8月17日：モーニング、犬山城下町

8月18日：トヨタ産業技術記念館



## 第 4 章 本会議

全体総括

分科会総括

各分科会報告

各プログラム報告

本年度の新たな取組

## 全体総括

副実行委員長 高階空也

第 63 回国際学生会議では、「Endeavors in Diversity」という総合テーマのもと、どんなに多国籍、多様な人材が集まった環境でも、相手を尊重しあいその中で努力することを目標に、9 日間努力し続けました。長時間議論する分科会に加え、事前 ST、日本文化体験、各種パーティー、また今年はフィールドワークとして ANA の機内食工場に見学に赴き、日本の技術を学ぶ機会も増設しました。分科会においては真剣に議論し、その他のプログラムでは精一杯日本を楽しむことができる企画を目標に、本年は真剣も楽しむも最大限体験できる企画を準備いたしました。

その中でも一番思い出に残る分科会について述べさせていただきます。テーブルごとに雰囲気も異なり、あるテーブルでは衝突や様々な感情により涙する場面が見られ、また一方では和気藹々と議論していたテーブルもありました。しかし、交流し議論した末に迎えた結末として残酷なものもありました。テーマに掲げた「様々な文化や価値観を持った学生が集まり心の底から交流し対話する」理想の難しさと厳しさを痛感し悔しい想いも致しました。しかし 8 月 27 日（日）に行われました Final Forum では、これまで話し合った内容を包み隠さず自信を持って発表し、ご観覧の方のアンケートにも「発表に圧倒された」という声を多く頂きました。短い準備期間の中で、レベルの高い発表をした参加者を拝見し、第 63 回国際学生会議に参加して下さったことに深く感謝いたしました。発表後笑顔で写真を撮る様子を見てみると、紆余曲折はありましたが最後には暖かい雰囲気で終わることができたと感じました。実行委員として、参加者の皆様にとって今後の人生で忘れがたい大きな経験となれば幸いです。

また本年度は「革命の年」という代表のスローガンのもと、昨年（62 回）の参加者出身国が 5 カ国だったことに比べて 19 カ国に飛躍したことや、上記でも述べました名古屋 ST の初開催、本会議中にテーブルを跨いだ企画“オープンテーブル”の実施、本会議終了後に東京と離れた名古屋でも Final Forum を開催するなど、これまでになかった新たな取組を取り入れました。全てのことが国際学生会議を大きくし、いい意味での革命を起こすことができたと考えております。私事ではありますが国際学生会議を経験することが初めてながら副実行委員長を務め、実行委員に助けられたことばかりでした。しかしこのような私を全力で支え、能動的に動いてくれた実行委員、また革新的な代表がいたからこそ、63 回がここまで大きくなったと感じます。

最後になりましたが、第 63 回国際学生会議を無事閉会することができましたのは、私たちをご理解、ご支援、ご協力いただいたすべての方々のおかげです。また今年はクラウドファンディングという新たな取り組みも取り入れ、顔も知らない OBOG の方々の優しさに胸を打たれました。63 年も続いている大きな会議の副実行委員長ができたことに感謝しますと共に、第 63 回国際学生会議に関わって下さった全ての皆様に心より御礼申し上げます。以上にて私からの全体総括とさせていただきます。

## 分科会総括

テーブルマネジメント長 齋藤嘉克

まず第63回国際学生会議(ISC63)の開催にあたり協力してくださった全ての方に心からの感謝を申し上げます。63年の長い歴史を持つ会議において、過去最高の国際学生会議ができたこと私たちは胸を張って思えます。このような素晴らしい国際学生会議ができたのも、私たちの趣旨に賛同してくださった皆さまのお力添えがあったからこそでございます。

近年、世界では「アメリカ第一」を掲げるトランプ米大統領が年初に誕生をはじめとし、多くの社会変化に見舞われました。その中で人類が普遍に持つべきとされた価値観が揺るがされています。そのような世界情勢の中、未来に責任のある若者として、現在人類が直面する問題へ意識を共有し、どのような価値観を普遍として大切にすべきなのかを重点的に考えるべく「人類が持つべき普遍的価値観を再考する」を総合テーマとして学生会議においてメインとなる分科会を作っていました。

テーマを達成するために行ったことは大きく分けて3つあります。1つ目は今年度初めて海外在住者をテーブルチーフに任命し、多様性の向上に努めたことです。2つ目に国連が策定する「持続可能な開発目標(SDGs)」とディスカッショントピックを相互にリンクさせることによって、より深く問題を掘りあげることになりました。3つ目に参加者の多種多様化です。今回は3点目にあげた事柄について述べさせていただきます。今年度は、19カ国1地域の史上もっとも多くの国からの参加者を迎え、多種多様な考えを持った参加者と分科会を通して意見交換を行うことでより質の高い分科会になったと思われまます。しかしより高みを目指すことは反動として弱みも生まれることを強く感じました。主に2点です。1つ目に、自分なりの意見を持った人が多い分、知識の差や英語能力の差から置いてかれてしまう参加者が少数ではありますが、見られたことです。2つ目に、国内と国外での考え方の違いを強く感じました。具体的に国内は周りのことを考えてしまうあまり、自分の意見に自信を持てず意見を自分から発言できない。反対に国外は自分の意見があっているのか関係なくどんどん発言しています。これらの性格の違いから少々の問題もありました。これらは多種多様な人材が集まるからゆえ生まれてしまう問題であると考えました。これらの問題は来年、ISC64として解決しより良い分科会を作っていくことでさらなる高みを目指し、そして達成することを願うばかりです。

再度ではありますが、分科会での議論に携わってくださった関係者の皆様に深く感謝の意を表しまして私からの分科会総括とさせていただきます。

## Table1

# Feminization of Poverty

## ～貧困の女性化～

テーブルチーフ Alyssa Marcel Matira Rances

### Introduction of selecting this theme

I chose Feminization of Poverty as my theme for ISC63 because of the preexisting problem of gender inequality around the world. Feminization of Poverty stems from the problems of gender inequality and biases and how most women are vulnerable to impoverishment. Personally, I come from generations of female-headed household and have witnessed the phenomena myself in my family for 4 generations already. Coming from a family with just a single mother present, I had thought of how different I was from the other kids who can grow up with a father and how the absence of a man I can call ‘dad’ has given me and my mother challenges, in all aspects but mostly, financially. I thought about how many women are also experiencing the same thing and how these children have suffered and what I can do to help them. I needed to find a platform to share and discuss the issue and to raise awareness of this kind of issue to the public and found the perfect opportunity in ISC 63.

### Appearance of the table

Although my table was by far, one of the most popular table among applicants, there was a scarcity of applicants that came from men, especially from the Japanese men. However, after a long and tedious process, I successfully chose 4 Foreign participants and 4 Japanese participants. 2 out of the 8 participants in total are men and come from Vietnam and Japan. The other female members are from Hungary, Brazil, Mongolia, and the rest of them come from different prefectures in Japan.

### What I got by facilitating discussion

I encountered a lot of problems during the main conference, one of which the language barrier that the members had due to the diversity of languages we spoke and the levels of English proficiency. But we decided to give consideration and an exception to the “English Only” rule that the other table had and allowed the Japanese members who are not confident in explaining themselves, a chance to explain themselves in the language that they are good at and those proficient members would translate for the foreign participants. Other than the common problems of arguments and misunderstandings, our table ran smoothly and was a



fun discussion for both me and the members. I learned the importance of time-management and how a good leader should be. As it was my first time to be a table chief of a conference, I pushed myself and isolated myself from my members but later, I found that a good table chief should not concern himself or herself about hierarchy but rather on how to work as a team. A good leader is not only a good speaker but should also be a better listener.

## **Main Conference Dairy**

### **◆ Sectional Discussion 1**

We had Discussions and Group Activities on the definitions of Feminization of Poverty. All members presented the FoP situation in their home countries using a PowerPoint slide.

### **◆ Sectional Discussion 2**

We also made most charts on this discussion to visually describe FoP.

### **◆ Sectional Discussion 3**

On this sectional discussion, we set table rules and goals to follow through all throughout the conference.

### **◆ Sectional Discussion 4**

We talked about the Sustainable Development Goals and how they can be related to FoP.

### **◆ Sectional Discussion 5**

We continued to discuss about the SDGs and tried to think about which country to discuss on the Final Forum.

### **◆ Sectional Discussion 6**

We concluded on which countries to include in the final forum and researched more on their FoP situation.

### **◆ Sectional Discussion 7**

We started to focus on the solutions that the countries has done to reduce poverty and how they affected these women.

◆ **Sectional Discussion 8**

We made our own proposal for the final forum and decided on which members to present for the presentation.

◆ **Sectional Discussion 9-1 1**

We made slides all throughout the day and had various run-throughs to finalize everything.



## 日本人参加者からの声

Table1 青山学院大学1年 山本翠蓮

第63回国際学生会議に参加して、得ることはたくさんありました。それは、普段生活していたら、得ることが出来ないものばかりで、非常に有意義な夏になったと思います。このような素晴らしい機会を私たちにくださった実行委員の皆様をはじめ、後援としてサポートしてくださった企業様、私たちの活動を支援してくださった方々にお礼を言いたいと思います。本当に最後までありがとうございました。この経験は、私にとって非常に大きなものとなりました。

本会議前から、私は参加者や実行委員の皆さんからたくさんの刺激をもらうことが出来ました。事前招集会の時から、直前の勉強会まで、日本人の参加者のみで議論をすすめる時が多々ありました。そのときに、私は今までに感じたことのない悔しさを感じました。私以外のメンバーは、私より年上ということもあり、今まで勉強している量も私と格段に違い、知識量も全然違いました。一人が意見言うと、すぐさま他のメンバーが違う観点から意見を言ったり、反論をしていたりしている中で、私は他のメンバーの早さについていけなかった場面がほとんどでした。自分の頭の中で、発言しなくてはと焦りを感じていたとしても、なかなか他のメンバーが意見している間に入ることが出来なくて、悩んでいました。そして、年下だからといって甘えることが嫌いだっただけ、何回も勉強会の前には日本語でもいいからと図書館で関連する本を借りて、学校の通学中に呼んだり、インターネットで関連する論文を読んだりしていました。年齢関係なく上の学年と同じ扱いをしてくださる、この会議は私の甘えるという弱みを改善してくれました。本会議前からでも、このような刺激を受けることが出来ました。

この経験は、本会議でもすることが出来ました。本会議では、国・地域も様々な人たちから意見を聴くことができました。その上、彼ら彼女ら自身が経験してきた貧困を自分自身の観点で話してくれるメンバーもいました。例えば、ブラジルからの参加者は、私たちに自分は幼少期の時に貧困状態にいたということを告白してくれ、彼女の壮絶な幼少期を聴くことができました。彼女から出てくる言葉、彼女が話している最中の表情は、私の心に刺さりました。それは、たぶんネット上で同じ話を見ていたとしても、受けることのできない衝撃でした。さらに、議論の途中にも刺激を受けることが出来ました。まず外国人参加者の意見の量に驚きました。この本会議中、海外参加者しか話していない場面が多々あり、テーブルチーフが私たち日本人に意見を言う機会をわざわざ作らなければならない状況になるほどでした。日本人は内向きであるという事は言われていますが、確かにそれはこの会議で痛感しました。

この会議で、私は自分で実感することが出来るほど成長したと感じています。それほど、この会議の中で、逆境に立ち向かいました。さらに、自分自身の無知や弱みを知ることが出来ました。前述した通り、これはこの会議に参加していなかったら、出来なかったことかもしれません。もしかして、大人になるまで経験できなかったかもしれません。なぜなら、学校生活は案外自分たちが思っているより、年齢の壁があつく、年下なら手加減してもらえらる環境だと考えているから

です。それに比べて、この国際会議は年齢、学年関係なく、みんな同じ土俵で戦うものと認識してもらえます。年上にとって、私は非常に無知な存在として見られていたのかもしれませんが、年下の私からしてみたら、同じ土俵で戦わせてもらえて、非常に良い経験になりました。さらに、もっと自分自身勉強しなければという気持ちにもさせてもらいました。

最後に、会議の内容からは離れてしまうのですが、この国際学生会議で出会った仲間は私の一生の仲間だと感じています。それは、ただ夏休みを一緒に過ごした仲間というだけでなく、逆境を一緒に乗り越えた仲間ということもあります。どんなに議論で言い合っている、議論が終わると途端に一緒にスキップした同じテーブルメンバーは、本当に私の一生の宝物です。

重ね重ねになりますが、この会議を企画してくれた、そして関わってくださった方々、本当にありがとうございました。そのおかげで、私は最高と胸を張って言える夏休みを送ることが出来ました。今後の目標として、この経験で得たことを活かし、海外という舞台など他の場面でも、この会議で成長した自分を活かしていきたいと考えています。本当に貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。

## 海外参加者からの声

Table1 Huynh Minh Phuc (Vietnam)

My uncle was a refugee in Japan after the Vietnam War ended in 1975. When I was small, he told me stories about Japan. He told me about his life; he told me about his friends' life; he told me about Japanese people's life. Ever since, I have always been curious about this country. As a kid, I was not dreaming of getting to Japan, since I didn't even know where it is. Instead, I wanted to see, to listen to, and to touch Japanese people. I wanted to know how they are different from us, the Vietnamese. I wanted to tell them our stories. I wanted to tell them about my life, my friends' life, and our people's life.

This summer, I did.

I was there in Japan. I was surrounded by the welcoming hands of my Japanese friends. I saw both the similarities and the differences between the two societies. And above all, I was given the chance to stand in front of so many people not only from Japan, but also around the world, and tell them about our stories. International Student Conference is the platform that we, the owners of the globe tomorrow, can come to discuss, to share and to understand. It is a great boost for me, and for all of us, to try to help and to try to solve the social issues happening out there. And that is my achievement.

Moreover, being a part of Table 1 was one of the best things in the conference. The

interest in feminism led me to a terminology that I have never heard of: *Feminization of Poverty*. This issue is not new, yet so new to most of us. That is because we often consider poverty as a problem of the society as a whole. Even when we narrow it down, poverty is still analyzed from the household scale where there are both males and females. Feminization of Poverty was actually coined in the 1970s, and it does still exist until today. However, its presence in the society is relatively vague unless we deeply examine it.

The issue, as we have found out through the discussion sessions, has been happening mostly to some particular groups of women like single mothers and elderly women living alone. In general, women are proved to be more vulnerable to poverty than men are. And in this case, single mothers and elderly women living alone are the most vulnerable of the vulnerable. Specifically, single mothers usually have to bear more burden in comparison to other women. They, at the same time, have to take both of the two common parental responsibilities: raising kids and making money. Lack of the partner means they have no one to share the job with, let alone their emotional life. Being a single mother means they are less attractive in the marriage market. Hence, they are not likely to have another partner with whom they can start a new family. Most single mothers have to work part-time since they have to spend much time on parenting. It is also because looking for a full-time job as a single mother is not easy. As for elderly women living alone, they may face the same problem. Due to health issues, they are unable to go to work. Besides, the social welfare does not provide them with substantial resources for life. Hence, most of them fall under the poverty line.

Feminization of poverty is real, and it is happening out there even without our acknowledgement. Thanks to the open table session in the conference, I fortunately came to know a real case right in Japan. Hina, a Japanese participant in the conference, told me about her friend who is struggling from financial hardships in her family. Her mother got divorced and became a single mother years ago. After the divorce, her mother started to work as a part-time worker to earn money and support her family of two children and an old grandfather. Hina's friend is the elder sister, so she is also trying to help her mother by taking care of the younger brother and her grandfather. After school, when everyone in the class plans to hang out, she has to commute back to her family far away from school, and goes to work to earn some extra money. The family does receive financial support from the government, but they are still suffering much from poverty. This story from Hina's friend terribly shocked me and everyone in Table 1 because it would feel so bad when you have to go to work to support your family while your friends are planning to have fun out there. This is happening now, right in such a developed country like Japan.

There are various ways to explain why women are suffering more from poverty than

men are. However, above all, the traditional gender is the deepest root. It leads to almost every problem that women around the world are facing. Traditionally, women not just in Asia but all over this globe are expected to stay at home and be a good wife or a good mother. The societal expectation on women limits their career path and their ambitions, forcing them to stay at the low position in the career ladder. We all this the *sticky floor*. Because of this, women cannot even touch the *glass ceiling*, let alone being stopped by it. Also due to the traditional gender role, girls are often not encouraged to go to school, especially in developing countries where the education system is still not prevalent. Parents often consider it a waste to invest in their daughters' education, because after all, they expect their daughters to get married and be a homemaker. Therefore, lack of education is a threat to the next generation of girls when they do not have substantial skills, knowledge and qualifications to get a well-paying job.

Feminization of poverty is detrimental, but it does not mean that we cannot solve it. In my perspective, the thing that we should focus on is raising awareness. It might be a bit too common, because we talk about raising awareness to almost every social issue. However, feminization of poverty is still unbeknownst to many people. They have not acknowledged yet its existence right in our lives. Hence, we have to make people know it first before doing anything else. A few people cannot solve the whole problem, but if we have the whole society together being aware of it, we can achieve anything. For example, I, and so many other participants, had never heard of this issue before we joined the conference. Thanks to the chance to meet and discuss, we realized that it was such a serious challenge the world has been facing until today. Now I am more aware of not just feminism, not just eradication of poverty, but also feminization of poverty as a real threat.

The 63rd International Students Conference did give me an opportunity to better myself, to get involved in addressing social issues, and to meet great people. It was not just making friends. We spent days together. We got through difficulties together. We stayed the nights together both to work and to have fun. I have never felt such strong connection between people and me. Though we come from every corner of the world, we have the same mindset in fighting for a better place to live. Though we speak different languages, we know what each other is thinking. Though we pertain to different cultures, we understand and celebrate the differences. We are not just some participants in the conference who gathered up Japan. We are real friends. And we will still be even after it.

My friends and I have made an appointment. We will meet each other again in 2030 – the ending year of the SDGs. We will gather and see how the world will be like at the time.

We will.

## Table2

# Coexistence of Robots and Human beings ～機械と人間のあり方～

テーブルチーフ 新美貴仁

### テーマを選んだ背景

昨今、自動運転などのAIが非常に話題になっています。それに伴い人間の生活はますます機械に囲まれることを当たり前だと感じるようになりました。そこで私は一つの疑問を持ちました。機械は人間の生活を本当に豊かにしているのだろうか？テクノロジーの発展により機械はより合理的になり、それに伴い人間はより合理化、効率化を求められる生活を余儀なくされてきました。そこでこのテーブルでは交通問題や人工知能という私たちの多くにとって身近なテーマを主に3つ取り上げることにしました。電車やバスなどのおかげで長距離を移動できるようになり、自動運転に伴い事故の減少が期待されています。しかし、依然として通勤・通学ラッシュや渋滞などの問題に私たちは悩まされ、自動運転と人間の意志との間に齟齬が生じたために大きな事故につながったという例もあります。また、徒歩という手段も、障害があるなどの理由で選ぶことのできない人もいます。このような交通に関わる問題の解決のために社会では一体どのような取り組みが行われているのか、またその視点を活かし、人間は機械と共生できるのか、21世紀というテクノロジー社会に生きる学生からの視点でこの問題を考えました。

### テーブル全体の様子

私のテーブルメンバーはマイペースな方々が多かったです。テーマに関する興味や知識は非常に高かったのですが、自分が方向性を確定しなくともスラスラと意見を出してくれた分、少しでも方向性がずれてしまうと修正するのが難しく感じました。また、機械と人間の共存というかなり漠然としたテーマから徐々に絞っていくところが個人的に一番苦労しました。

### 事前勉強会

第1回(7/1)は、早稲田大学で行いました。まずは初めて国内参加者全員が顔合わせするという事で自己紹介を行なった後に、AIについて調べてきたことをパワーポイントで発表し合いました。参加者のほとんどが学習してこなかった分野であっただけに、まずは好きな分野を調べてくるよう指示したので石黒浩教授のテレノイドやシンギュラリティ、HALなど様々な発表がありました。質疑応答は英語で行うようにしました。

第2回(7/22)は、名古屋外国語大学で行いました。そこでは、分科会をどのように進めていくか、外国人参加者とのペアワークを誰にするか、どんな内容についてリサーチを行うのかについて決めました。ここで私が今までかなり漠然と分科会構想を決めていたことに気づかされまし

た。私の中では最終的に機械と人間の共存まで持って行くつもりでしたが、そのアプローチが曖昧であったために参加者にプロセスを示し、どうしてこの内容について議論する必要があるのかを説明しなければならないことを強く実感しました。ペアワークについてはAIと日常生活、医療、仕事などを絡めてどんな問題が起こっているのかをリサーチすることにしました。その後、愛知産業技術記念館に行き、自動車の成り立ちについて見学しました。豊田喜一郎が残した言葉「機械は人間と一体となって完全になる」にメンバー皆深く考えさせられました。

第3回(8/8)では特にテーマ設定などの勉強会はしませんでしたでしたが、大阪大学の教授である石黒浩さんの研究室訪問に行きました。そこではジェミノイドやテレノイドなど、ロボットとは何か、人間とは何かをテーマとした彼の研究成果を知ることができ、ますます機械に関して興味を持つことができました。

## 分科会 Dairy

### ◆ 分科会 1

まず以前自分が国内参加者と海外参加者をペアにして出したプレゼンテーションをやってもらいました。そこでは、3チームがそれぞれHAL、自動運転、仕事の代替について10分ずつ、質疑応答を5分ずつ行いました。機械の中にもAIは含まれており、それと関連させながらのプレゼンテーションでした。この分科会を通じ、世の中に一体どんな問題がはびこっているのかについて触れることができました。

### ◆ 分科会 2, 3

今度は機械によるメリット、デメリットにはどんなものがあるのかをポストイットに書いていくというグループワークを行いました。参加者に思いつく限りのことを記述し仕分けしていくうちに、皆が似通ったデメリットやメリットを感じているということが分かりました。その中で特に共通する分野に関してより深くの情報を得るため、再びペアワークを行いました。

#### 1) 健康

最新AIの技術が外科手術に用いられています。これは症状のデータをあらかじめ機械にインプットし、実際の患者の写真と照らし合わせることでそれが異常なのか正常なのかを判断するという方法です。現在は人間が判断するよりもさらに正確なソフトが作られています。

#### 2) ロボットによる職の代替

自動化により、あまり技術力を必要としない仕事は、昔と比べてますます代替されています。しかし技術の進歩により高い技術力を必要とする職まで代替されることになると、人間は突然技術の向上をすることは難しいため、その進歩についていけなくなるという事態が発生します。

#### 3) 将来の交通 (~2040年)

交通を利用する際、海、陸、空それぞれに問題が存在します。例えば陸の場合、交通渋滞により遅れが生じる、個人的な場所への輸送は困難であるといった問題に対処するためにどのよ



うな技術が開発されているのかをまとめました。

#### 4) 人間のコミュニケーションスキル、テックネック

デジタルデバイスの過度な使用により、直接会って話す機会が減少、逆にあまり使用しない人がフローの時代に乗遅れるといった事態が起こっています。また、長時間の使用により十分な睡眠時間が取れない、耳や目に過度なダメージをもたらすといった事態が生じています。これらの問題の中でさらに自分たちが扱うべきトピックとはなんなのかを話し合いました。その結果自分たちはより身近な存在である交通機関に的を絞ることにしました。

#### ◆ 分科会 4

2 日目の分科会では、まず交通機関の発展について次のようなプロセスを踏むという意見で一致しました。

—Background この問題を話し合うという背景

—Problem 一体何が問題となっているのか

—Present innovation & purposes 現在の技術がどこまで進んでいるのか

—Future innovation 将来の技術がどこまで進んでいるのか

—Benefits & Risks 技術による人間やその環境に対してどのような利益、不利益が存在するのか  
しかし、ここで一つ問題が生じました。**Transportation** だけでは単なる調べ学習になってしまい、自分がやりたかった機械と人間の関係性からだんだん離れていきました。そこで**Transportation** を他の分野と結びつけ、二者の関係性を通じて人間との関係性に応用しようということになりました。

#### ◆ 分科会 5

ANA の工場見学後、予定よりも帰る時間が遅くなりメンバーも疲れていたため分科会の内容を急遽変更しました。次の日に予定していた 15 分ほどの **Transportation** に関する動画を視聴し、感想を共有するだけにしました。

#### ◆ 分科会 6

この分科会では **Problem** について深く考えるようにしました。前日に他の分野との結びつきの重要性を感じたため、何が挙げられるのかを列挙し、まとめていった結果、次のような分野に絞られました

- 1、 Transportation and Pollution
- 2、 Digital Divide
- 3、 Gender Discrimination
- 4、 Unequal Access
- 5、 Government lack of investment

## 6、 International relations

それぞれについて、メンバーを分けて **Research** を行い、発表するという形をとりました。また、他のテーブルと被っている箇所(汚染問題はテーブル **Table3**、ジェンダーはテーブル **Table1**、政府の投資はテーブル **Table4**、国際関係はテーブル **Table5**) もあったので、オープンテーブルでどのような問題が考えられるかを質問してみるという形をとることにしました

### ◆ オープンテーブル、分科会 7

オープンテーブルではそれぞれのテーブルに、テクノロジーに関連してどのような問題が生じているのかを問いかけることにしました。その結果、様々な問題が挙げられましたが、ある人から、どうして **Transportation** について議論しているのか、と質問され、大きな壁にぶち当たりました。確かに自分たちのテーブルの目標としては『機械と人間の共存』であり、その身近な例で普段誰もが使っている交通機関について話し合ってきたものの、そこに的を絞るはっきりとした理由がどうしても答えられませんでした。ロボットや AI について事前勉強会で知識を積んできましたが、それが十分に活かせていないことは深刻な問題であると考え、これからの議論の方向を再考しなければなりません。ただ今まで **Transportation** についてリサーチを行ってきたため、その知識も活かすべきです。その結果、

- 1) 現在の問題点
- 2) AI がそこにどのように活かせるのか
- 3) そのメリットとリスク

についてもう一度考える方向性に変えることで一致しました。

### ◆ 分科会 8, 9

25 日になり、そろそろファイナルフォーラムも視野に入れる必要がありました。「Traffic jam & Accident」「Duration of commute」「Lack of mobility」の 3 つの問題点についてグループワークを行い、上記の 3 点について話し合いつつスライド作成に取り掛かりました。そろそろ疲れが見えてきたのか皆なかなか集中することができず余計に時間をかけてしまいました。結局この日には問題点をまとめた結論を出すことまでには至りませんでした。

### ◆ 分科会 10, 11, 12

最終日はこれまで調べてきた交通についてのまとめを行いました。その中で特に結論について重点的に議論を行いました。学生の視点からこれらの解決に向けてどんなことができるのか。何かアクションを起こすことができるのかを話し合いました。世の中には障害者や高齢者など、容易に交通機関を利用することのできない人もいます。そのため、機械と人間が共存するには、誰もが不自由のないような交通機関を整備することが必要であるという結論に至りました。

## テーチを通して学んだこと、気づいたこと

まず初めに感じた点として、私は他のテーチに比べて圧倒的に英語力が足りませんでした。この学生会議に向けて自分なりに英語は勉強したつもりでしたが、どうしても議論が白熱してくると意見が次から次へと飛び交い、それら全てを頭の中で整理し一体どんな方向に向かっているのかを瞬時に判断することに非常に苦労しました。その面で、日本人参加者はとても親切で、わからなかった部分を分科会が終わった後に丁寧に教えてくれたりして本当に感謝しています。他にも私の中で AI やロボットについての知識は他の学生に比べてある方だと自負していたつもりでしたが、テーブルチーフとしての力は乏しく、うまく議論が回せなかったり皆がどんなことを考えているのかをうまく引き出せずにいました。その面では、サブテーチで去年テーチをしていた山本さんに非常に助けられました。テーブルチーフはテーブルのリーダーであるため、容易に動揺したり苦しい姿を見せることはご法度であったにも関わらず、自分のメンタルの弱さから感情が優先してしまうことがありました。私のことで精一杯だったため全体を見渡せていなかったところが非常に反省すべき点であると感じた一週間でした。

もう一つ感じた点としては、テクノロジーと一概に言っても国が違えばその捉え方はガラッと変わるということです。日本は、最近ではあらゆるものがネットとつながる IOT 社会が形成されつつありますが、他の国では必ずしもそうとは限りません。その実情を知るためには、国内の学生と議論しているだけでは限界があると感じていましたが、国際学生会議はそれを実現してくれる非常に貴重な経験でした。それでも背景の違いから、同じ目標に向けて一つのアクションプランを実行したり、学生なりの結論を出すのは難しいと感じました。たとえ一つの解決策を提示したとしてもそれが万能であるとは限らない上に新たな問題を呈することもあります。学生という何でもできる時に本気で問題に立ち向かい、本気で調べ、本気で議論することの大切さ、楽しさを知ることができたのは私がこの ISC63 に携わってよかったと感じたことの一つであるように思います。このテーマは 1 週間の議論で完結するようなものではないので、是非将来のテーチにこれを引き継ぎ、さらに深い議論へと導いてもらうことを強く願っています。



## 日本人参加者からの声

Table2 東京大学3年 馬淵将明

In this essay, I am planning to summarize what I had done during the 9days program, 63<sup>rd</sup> International Student Conference (hereinafter ISC63), mainly focusing on the content I discussed in the table discussion, and describe my own achievement through the conference.

First, I want to do a brief review of the ISC63. During the program, I spent the whole time surrounded by lots of student with various majors, nationalities and backgrounds, which meant that I was in a significantly diverse environment. I experienced discussion and presentation which is the main part of this program together with them, and not only that, I also enjoyed the excursion, recreation, field trip, cultural experience event, and so on.

Among all of the experience, the most crucial one for me was the discussion I had with my table members. The topic was about the relationship between human and machine, or technology. Nowadays, our life cannot be separated from machine's contribution but we should cast some doubt on this situation because relying so much on the machine will have more or less impacts on us human beings. For example, in the near future, it is predicted that large part of our labor force will be replaced by artificial intelligence. This means that some of us human will lose their job in the near future. Like this case, the technology will bring us not only benefits but also some downsides. So during the discussion, we thoroughly did research and try to find out the benefit and downsides of machine, and finally introduce some technology that might be beneficial enough to surpass the weak points they have and solve the current problems without causing side effect.

The most difficult point in the discussion was caused by the difference of the background we each had. Especially, the foreigners' ways of thinking sometimes seemed totally different from us and it was hard to consolidate them with my opinion. But gradually, I learned how to handle this friction and start to deliver my opinion clearly with respecting what others are saying. This management skill was the most important achievement I had.

At last, I want to illustrate my awareness on people, especially us Japanese. During the ISC63, we did enjoy the interaction beyond lots of gap between each, but I think there was still a big wall. As Japanese is the mother tongue and most comfortable way of speaking for us, we were sometimes reluctant to get together with foreigners and preferred to be with the other Japanese with Japanese language comprehension. In my opinion, however, this is not a welcomed situation. Japanese should not lose the chance to interact with people from other backgrounds and get the inspiration from them. In order to achieve this, we need to get out of one way to step forward. And this is a significant challenge imposed on us youth.

## 海外参加者からの声

Table2 Ruxandra-Ioana Florea (Romania)

*The goal of this report is to describe my achievements, analysis, ideas, suggestions and awareness during ISC63 period. Each paragraph contains examples of achievements, ideas and awareness and describes my personal experience during the conference.*

### Introduction

The 63<sup>rd</sup> International Student Conference in Tokyo has successfully combined global issues, such as climate change and feminization of poverty with sustainable development goals. All table presentations during the final forum have proved a high-level of research and understanding of the topic. Each table has carefully recommended solutions which would improve the global status-quo and has emphasized the importance of individual action for the problems discussed. This conference was an ideal platform, as it involved exciting discussions in an international environment bringing together young leaders, specialists and researchers.

### Achievements

Participating in ISC63 has brought many achievements to me. As a member of Table 2, Humans and Machines, I can say that all members have conducted thorough research on the topic of technology and on the latest innovations. During the research time, I particularly focused on the self-driving car and how this innovation could alleviate the problem of traffic accidents. I also cooperated with two other table members to prepare a team presentation on how Artificial Intelligence is becoming more integrated in our daily life. Throughout the conference period, Table 2 has experienced a lot of intense and productive discussions. During table discussions, I constantly communicated my opinion, suggestions and recommendations to the table chief and to the other members of the table. Moreover, asking question to the other members of the table during discussions has been proven useful, as it has helped everyone understand the table topic better. Oftentimes, all these actions have contributed to deciding the direction of our future discussion and the content of Table 2's final presentation. As a member of ISC63, I have constantly interacted with young students from all over world, representing various cultures. I have exchanged valuable information and shared my thoughts with all participants during the open discussions. Through the open discussions and active engagement, I was able to understand all five table topics better and experience new approaches to global issues, by viewing all final presentations. Besides table discussions, open discussions and final forum, one special achievement to me was being able

to make new friends and connect with international students through various entertaining Japanese cultural activities.

### Analysis, Ideas, Suggestions

Throughout ISC63 period, I tried to bring a contribution by expressing my ideas during discussions. As a member of Table 2, I suggested the structure of our final presentation, proposal which was accepted by all members. The idea I proposed was to present three current problems regarding transportation and suggest innovations which could minimize the problems. The structure was adopted and after conducting more research, all members of the tables voted on which problems and innovations should be emphasized, presented and explained during the final forum. The topic of Table 2, Humans and Machine, was a very broad topic and during our table discussions, all members felt that we should explain to the audience during the final forum the reason why we chose to focus only on transportation and not on other topics. My idea was to bring the argument that transportation heavily influences our everyday life, as we depend on it. Innovations in the field of transportation could bring benefits, such as empowerment of old and disabled people and narrowing the gap between people in developed and developing countries. During the open discussion, I suggested my ideas about the individual's role in climate change. I suggested creating a recycling culture in each country, promoting global climate change initiatives more and changing the perception of climate change into a global crisis which needs immediate collective action.

### Awareness

There are plenty of valuable things I have learnt by attending ISC63. The most valuable thing I learnt is: how to reach common ideas and common goals while combating the difficulties of working in a multicultural environment. Another valuable thing I learnt is: the importance of team work. Even though I was aware of the necessity of teamwork, I took it for granted before the conference. During ISC63 and table discussions, I realized how vital teamwork is and that our table used it in every single stage and moment of the conference. All decisions in the team were taken through majority voting and everyone's opinions were heard all the time. Furthermore, because of effective teamwork, the other members of Table 2 and I were able to equally split our job and responsibility. In order to have effective teamwork and reach progress, a good relationship between the members is needed. Having spent nine days with my table members was helpful, as it made me appreciate their perspective, thoughts and get to know their personalities. Teamwork together with good relationship between members have facilitated our communications and has made us, the members of Table 2, more efficient

in achieving our final goal and presenting our final presentation to the public.

### Conclusion

To sum up, ISC63 was a great experience for me. I have achieved a lot during table discussions and throughout the conference period. I have made new friends, contributed to the final presentation with many ideas, suggestions and I have conducted intense research on the topic of Humans and machines. Because I participated in ISC63, overall, I became more open-minded by realizing there can be plenty of different perspectives and approaches to same topics and by experiencing through the conference, the many benefits of being part of a multicultural environment.

## Table3

# Climate Change ～気候変動～

テーブルチーフ Nguyen Dinh Van Anh

### Introduction of selecting this theme

We live in a crucial moment in the Earth's history when climate change is seriously affecting natural systems and human life. Learning about climate change, not only to confront current challenges, but also to maintain a sustainable way of life into the future. The earth is crying and calling us for our action. This is the time that it should be discussed and solved by our young generation globally.

### Appearance of the table

In general, all members researched and discussed deeply about the topic, which achieved our goals. Moreover, we conquered the English barriers among students, as well as learnt leadership skills, presentation, teamwork skills.

### What I got by facilitating discussion

First and foremost, I learnt leadership skills and methods to motivate, encourage members in a team during 11 challenging discussions. Furthermore, we all learnt lesson of communication and sympathy when it comes to the moment we were sharing our different thoughts coming from different backgrounds.

### Main Conference Dairy

#### ◆ Sectional Discussion 1

Firstly, I created rules for discussion time that everyone could contribute and follow the rules such as using less bottle water, not using plastic bags, or turning off the lights which are related to our table topic in order to protect the environment. Moreover, everyone would set the goal so that we could follow it strictly as well as with the timetable in each discussion time.

#### ◆ Sectional Discussion 2

After lunch time, we focused on researching the reasons and consequences of climate change and summed up ideas on the board by playing a game which team is the fastest one



writing down all the consequences of climate change on board. Last but not least, we deeply looked into 3 real cases such as Palm Oil Tree Industry Indonesia, Climate Refugee in Bangladesh, Plastic Problem.

### ◆ Sectional Discussion 3

After dinner, we watched documentary movie “Before the flood” for 1 and a half hour then shared our thoughts of what we have learnt from the movie. We found the documentary it summarizes most of the ideas, reflects what is happening in the world as well as evokes our eager to change the environment. We closed our eyes for 1 minute after the movie and shared the moment in the movie we found the most interesting and memorable. We had different point of views and shared our bunch of thoughts in terms of the documentary.

### ◆ Sectional Discussion 4

It was a big question when it comes to the solution. We divided there are 2 ways to solve the problem which are individual one and international one. We concentrated on the international level actions by researching COP21 which is the latest agreement in general information and Action plans of 4 big emitters India, US, China, Europe.

### ◆ Sectional Discussion 5, 6

Continuing on COP21, I divided 8 members into 4 group representative of China, US, India, Europe and started debating with each other their action plans. By this way, we noticeably see how countries are really taking actions from what they compromised with. Insightfully, we noticed that based on their economic benefits as well as facilities, each country has its own solution, however, it should be a practical plans and shouldn't have any conflicts with others.

### ◆ Sectional Discussion 7, 8

As a result that US withdrew COP21 which has made a big impact on solution of tackling climate change issue on international level, we moved on to individual level which emphasized on what youth, consumers, we have the power to tackle the issue. Each team includes 2 people started researching and presenting their ideas, then we concluded as a mind mapping of what youth can really do.

### ◆ Sectional Discussion 9, 10, 11

Preparing for the final forum presentation would take a long time so I decided to spend a

day in order to plan the contents, make power point and practice speaking fluently. We also divided into 3 groups, which are speakers, power point makers, and one group prepared for the interaction session in the final forum. Regardless of regions, nationalities or backgrounds, we perfectly worked and cooperated for the best result of ISC.



## 日本人参加者からの声

Table3 大阪大学 3 年 稲田健汰

はじめに、9日間かけがえのない時間を共にした ISC63 参加者の皆さん、素晴らしい会議を運営してくださった実行委員の皆さん、**Final Forum** に僕たちの発表を聞きに来てくださった皆さん、応援してくださったすべての方々に感謝の気持ちを伝えたいです。僕にとってこのような大学外の、さらに世界中の多くの国から来る学生たちと関わるイベントに、自分から応募して参加するのは初めてだったので、様々な新しい経験をすることができました。

テーブルでのディスカッションでは、自分一人では考え付きそうもないアイデアが出てきたり、その地域に住んでいる人にしかわからない問題点などを知ることができ、改めて様々なバックグラウンドをもったメンバーたちの多様性を感じました。会議の前半はそれぞれの問題についてリサーチし考えをシェアすることが多かったので、議論をすることはあまりありませんでした。しかし、会議の後半で実際に発表する内容を考える段階では、時には衝突することがありながらも、徐々に各メンバーの考えから一つの大きなアイデアを創りあげることができ、さらに、この過程の中で多くのことを学びました。僕自身、議論の中であまり自分の意見を表現することができず悔しい思いをすることが多くありました。単純に僕の英語力が足りなかったということもありますが、それ以上に他の海外からの参加者と比べて、自分の意見を伝えたい、聞いてほしいという気持ちが足りていなかったからだと思います。事前招集会から本会議までの間にかけて、テーマに関連する英語の専門用語を覚えたり、これまではあまり意識していなかった海外での問題を調べたりと、自分なりに本会議に向けての準備をしてきたつもりでいました。しかしこれらはただ知識を増やただけであって、テーブルメンバーと議論をする上で重要な、結局自分はどうしたいのか、ということを考えることができていませんでした。また、意見が対立した際にも、多くの場合は多数派の意見に流されてしまいますが、テーブルメンバーの一人は自分の考えをしっかりと貫き通し、たとえ意見を変えるとしても、決して周りに流されることなく、自分が納得するまで考えていました。しかし自分の意見に執着するわけではなく、他のメンバーの意見を参考にすることも多くありました。このようなことができるのも、しっかりとリサーチを重ねたうえで問題点を整理し、自分のアイデアに自信を持っているからだだと思います。自分のアイデアに対する自信とともに、それを変えることができる柔軟な考えを持ち合わせることで、物事を考え、議論をする際に重要であるということを感じました。またこれは会議とは直接関係ないですが、海外参加者の ON と OFF の切り替えがすごいと思いました。会議中はとても落ち着いて話していた人が、いったん遊びに行くと羽目を外してはしゃいでいて、本当に同じ人なのかと目を疑ったこともありました。ぼくもこのように、気持ちの切り替えを大事にして、その時その時を最大限楽しんでいきたいなと思いました。

僕たちのテーブルのテーマは、“Climate Change”でした。これは僕たち人間が直面している大きな問題の一つであり、会議の中でも様々な意見が出ました。最終的に何か具体的な行動を起こ

そうということになりました。例えば、No meat Saturday という日を作り会議の参加者全員に広めたり、Facebook のページを作成しもっと環境問題に対する危機感を世界中の人々に持ってもらうとしました。このように具体的な行動を起こせたということは、この会議での大きな成果であり、ここで終わらせるのではなく今後も続けていくことが大切だと考えています。これ以外に、僕が一番重要だと思い、テーブルメンバーの全員一致で決まったものがあります。それは、”We, the youth (consumer) have the power. We are the future.”ということです。これは僕たちのテーブルテーマである Climate Change だけでなく、僕たちが直面しているすべての問題を考える際に重要になってくると思います。今後もこの言葉を忘れることなく、様々な活動をしていきたいと思っています。

この9日間の中で、とても貴重な経験をすることができました。ここで得たものを今後の生活の糧として、様々なことに挑戦していきたいです。ありがとうございました。

## 海外参加者からの声

Table3 Iselin Helloey (Norway)

Before coming to this conference, I had ideas and knowledge, but I had no means to put these ideas out. I did not have many people who had interest in what I said or my cared about my opinions. I didn't have many I could share this knowledge with either. Coming to the conference, gave me an opportunity to discuss the matters that I'm interested in with other people who have the similar concerns. I'm the type of person who needs to talk or write something to organize the ideas that I have in my head, and that's one of the things I achieved. I was given a space to talk, but also a space to listen and learn.

One thing that I have confirmed coming here is that there is hope. As I'm an aspiring biologist and my table is climate change, it's very easy to drown in the bad predictions of the future climate and environmental problems. The facts are there, and they are honestly scary and depressing. Talking in this table has taught me that there is hope, if we are willing to look past the depressive facts but view the opportunities instead.

I believe that the most dangerous sin here is ignorance. The environmental problems today are caused by greed, but ignorance is what stops us changing it. In a way, this conference is exactly what we need to fight that ignorance. People need an opportunity to talk and learn, and it's only with a widely distributed information flow regarding climate change that we can change something. This is not something a few individuals can do on their own, but it's together we hold the hope. This is why ISC is so important because it brings

individuals together. Not only individuals but youth from different cultures and countries. It's only with this kind of diversity that you can truly cover most perspectives of a global issue like climate change.

During the discussion, it has been quite important for me to listen to everyone. I know that sometimes I was maybe a bit excited and have a lot of thoughts that needed to be said. But one of the reasons I stayed silent sometimes was that I realized something. What makes my words more valuable than others? Why bother coming to a discussion if not every voice is heard? Also, since people communicate differently, I gave a tip to a friend in my table. If you don't know what to speak, write it down instead. That's another way of communication, and finding the keys to express ourselves is a big part of the self-discovery and growth people at ISC may experience.

I am very happy I got the chance to experience Japan and the Japanese culture. Being aware of other cultures is also a part of learning, and it's very important to understand other cultures if we want to make a change in such a globalized world. I also felt that my time in Japan before the main conference made me understand the Japanese people better during the discussion. It's been a pleasure discovering Japan, and I hope that I also could show a bit of my own culture to the people I met.

I liked how well the table topics were related, though I wish we had more opportunities to explore those connections. It's important to realize that many of the big issues we are facing today are in fact related, and sometimes change in one might solve another. Also, we would get another perspective if we had given more time to have those open discussions.

That being said, I also wish we had more time to discuss our own table topics as well. Climate change is a very broad topic, and there are many other topics related to it that we could have explored. I still very much agree with the way we narrowed it down to "youth action". We as youth are the ones who must live with the consequences, and it is us as youth that will need to seriously consider the climate before taking choices. The choices we will take is on a personal level, but also on a higher, organizational level. It is today's youth that will be tomorrow's leaders after all, and though I wish we could influence today's leaders, it's not as easy. Reshaping culture and governments is very difficult, but the way I see it, that's the only way we can truly change the direction we're heading and ensuring our own survival in the long run. Because that is what this issue is all about, survival. Not only survival of other species and natural environments, but for us, humans. I suggest that we do the future generation a favor and act in our power now.

One thing I hoped for when arriving the conference was that we could come up with a new, revolutionary idea. I guess I was a bit naïve and hopeful. After all, we are not the only

group out there discussing this theme. There are already smarter people out there than me trying to wrap their heads around a simple and yet effective way of climate change mitigation. Could we find something that other people have yet to realize? The answer to that is no. But coming to the same conclusion as many others just mean that it's the right direction to go.

The climate change issue is like a big wall. From a distance, you can see over it, but no matter how hard you try, and no matter how big your ladders is, there is trouble getting over it. However, difficult does not mean impossible. The ladder we have found is small, smaller than I wish, but it is still a ladder. The way I look at it, all the other groups discussing this issue also have a ladder. All the individuals caring about the environment has a ladder as well. It is only by combining these ladders that we will be able to climb over the wall to a future with less severe climate issues.

There is no wonderful solution, there isn't a particularly comfortable way to overcome the change in climate. However, that is no excuse to close our eyes and pretend like this is something for the future generation to deal with. After all, consumers have power. Youth have power.

## Table4

# Reconsidering Capitalism ～資本主義の再構する～

テーブルチーフ 内田崇

### テーマを選んだ背景

現在、この社会は様々な問題であふれています。もともと私が最も関心を寄せていた気候変動を含む環境問題を始め、シリアやスーダンでの人道危機、世界を震撼し続けているテロリズム、トランプ大統領の誕生を始めとする政治全般に対する不信感など、枚挙に遑がありません。その全ての問題に共通する問題は何か、根本的な問題は何かと考えた時に、あまりに単純かもしれませんが、「貧困問題」という単語が脳裏に浮かび、さらに突き詰めて考えてみると「資本主義」が多くの問題を引き起こしているのではないかと考えるようになりました。しかし、我々は社会主義に戻ることはできません。それでも、現状の資本主義経済を続けていけばあまりに多くの弊害を生じてしまうことは想像に難くありません。これから世界はどこへ向かえばいいのか。世界各国から、様々な背景を持つ学生が一堂に集う国際学生会議という貴重な機会の元で現代社会の根幹に存在する問題に一石を投じることは議論に値すると考え、「資本主義を再考する」をテーマとして掲げるに至りました。

### テーブル全体の様子

参加者を選考する段階で、「自分の中で意見がはっきりとしていて、かつそれを人に伝えようとする意思あるいは熱意のある」ということが私の中の一番大切な基準であったので、ディスカッションにおいて誰からも意見が出てこないというような事態には陥りませんでした。ファイナルフォーラムの発表者を決める時はすべてのテーブルメンバーが発表をしたがったため、私がかくじを作って代表者を選出しなければならなかったほど、全員が積極的に議論に参加してくれました。また、選抜段階において英語力を重視することはありませんでしたが、結果的に選んだ国内参加者の英語力も高度なものであったので、議論に全くついて行けない、あるいは発言したくても英語で話すことができないということもありませんでした。さらに、選考の際、考慮したのが男女比です。男女比の不均衡があるとテーブル内でさらに派閥ができて、せっかくのグループディスカッションを最大限活かすことができないかもしれないと危惧していたので、男女比はほぼ 5:5 で選抜しました。これらが功を奏し、テーブル全体として仲良くなり、話し合いをすることができたと思います。また、個々人が自分の役割をしっかりと認識できていたので、ディスカッションが非常にスムーズに、また各メンバーがのびのびと議論をする土台も出来上がっていたと思います。

## ティーチをして学んだこと・気づいたこと

正直なところ、私は十分な事前準備をもってこの会議に望んだわけではありませんでした。なので、テーブルチーフ（以下ティーチ）としてもっと何かできたな、という思いが一番強いのが今回の感想です。ティーチはメンバーの誰よりも知識を持っているべきであるとはわかっていながらも、メンバーの頭の良さや知識量に圧倒されることもしばしばありました。しかし、だからこそ「話しやすい環境を作る」ということに全力を尽くしました。何度も精神が折れそうになったけれど思い悩んだ顔をメンバーに見せないこと。笑顔で個人的に話しに行ってメンバーの緊張を和らげること。自分の長所を生かせるような場を作ること。例をあげればキリがありませんが、テーブルメンバーに対する気遣いや楽しい雰囲気作りを徹底しました。自分を含めて十人もメンバーがいる中で全員に気を配り個性を生かしていくことは大変なことでしたが、この点が一番今回成長した点であったと思います。また、学んだ点としてあげられるのが、最初に目標を立てることの重要性です。具体的には、ファイナルフォーラムでどのような発表をしたいのか、それにはどのように議論を深めて行けばいいのか。この点は知識がないと議論の方向性もわからないので、事前に勉強しておくことがやはり肝要であるなど改めて感じました。そして、自分にとってのリーダー像も確立したように思います。私がティーチとして選ばれた時は「縁の下の力持ちのようなリーダー」を目指していましたが、今回のテーブルではそれが上手く実行できました。しかしメンバーが異なれば当然そのグループにおける適切なリードの仕方も異なります。良いリーダーであるためには、常に状況を冷静に分析し、適切な方法をもって柔軟にチームをまとめていくことが重要であると痛感しました。

## 分科会 Diary

### ◆ 分科会1【ブレインストーミング】

最初に各人の問題意識を共有したのち、暫定的な目標を設定しました。「ディスカッションが終わるまでに、資本主義とは本当は何かということを全員が理解し、そのプラス・マイナスを定義して、資本主義がもたらす多くの問題に対する具体的な解決策を提案する。」その上で、資本主義について共通の認識を持つため、マインドマップを用いて定義づけや資本主義に対するイメージ、プラス面やマイナス面を話し合いました。さらに資本主義には3つの側面（経済・社会・政治的側面）があるということを確認し、3つのグループに分かれて問題点やこれからの議論で深めていきたい点を洗い出しました。また、簡単なルールづくりも行いました。そこまで多くのルールは作りませんでしたが、議論がヒートアップすると話したくても話せない、話せないうちに次の議題に行ってしまったということが往々にして起こります。そのような自体を防ぐため、手をあげた人に発言優先権が付与されるというルールを作り、可能な限り多くの意見を出してもらえよう環境を作ろうと心がけました。また、各3時間の分科会の中で、だいたい1時間議論したら休憩を入れるということも決めました。ディスカッションは、常に他の人の意見を聞きながら頭を働かせておかないといけないため、精神的な疲労はとてもしばしば、常にリフレッシュした状



態で議論の質を最大限高めようと努力しました。

#### ◆ 分科会 2 【経済的側面から見た資本主義】

3つのグループで話し合ったことに基づいて議論を進めました。経済のグループは①自由市場システム②イノベーションと効率化③限られた資源の独占④所得の不平等⑤大量生産と大量消費、について、ディベート形式ないしはディスカッション形式で内容を深めていきました。私の印象的に強く残ったのは、自分が実際に見てきたこと、自分の国で起こっていることなどを各人が議論する中でぶつけていく姿です。海外参加者はもちろんのこと、一口に国内参加者と言っても自分たちの経験してきたことはそれぞれであるし、行ったことのある国の現状や自分が実際に生活してきた中で感じたことを聞ける機会は意識しないと作れないものであったので、非常に貴重なものでした。

#### ◆ 分科会 3 【社会的側面から見た資本主義】

この分科会では特に「幸福 (happiness)」について話し合いました。「幸福とは何か」という定義づけから行い、いつ幸せを感じるか、成功とは何か、そしてお金で幸せは買えるのかといった議論に発展しました。そしてこれらを是正していくためには教育が必要であるといった結論になり、実践的な教育で注目を集めるフィンランドの例が紹介されました。自分の経験に基づき非常に興味深い意見も多く出たのですが、幸福の定義を行う際に一人の参加者から「長期的な精神的な状態であり、幸福であるためにはポジティブなものの見方が必要だ」といった意見が出てから議論が動かなくなり、解決策として出された「教育」があまりにもありふれたものであったことから議論は不完全燃焼に終わりました。

#### ◆ 分科会 4 【政治的側面から見た資本主義】

ここでは小グループで話し合った際に出てきた5つのテーマ：政策（ロビー活動など）、汚職などによる人への影響、メディア、帝国主義（先進国と発展途上国の関係性など）、そして透明性について話し合いました。特に経済の面で話し合ったことと重複が起こったりもしたのですが、やはり資本を持っている人間ないし企業がその土地の政治においても非常に影響力を持っていることを確認しました。あまり資本主義を政治的な内容から考察することは多くないと思うのですが、この分科会でも各人が様々な視点から意見を持ち出してきて興味深いディスカッションとなりました。

#### ◆ 分科会 5

この日は ANA 工場からの帰りが遅くなってしまったので、オリンピックセンター近くに夕食を食べに行くと同時に議論以外のことも含め、様々なことを話し交流を深めました。実質分科会一回分を潰したこととなってしまいましたが、ここでかなり仲良くなったなど個人的には感じま

した。

#### ◆ 分科会 6【ケーススタディ】

この分科会では、今まで話し合ったことを元に、5つの国を決めてペアを作り、各国での経済体制などを調べました。5つの国とは、シンガポール・インド・キューバ・ベトナム・ロシアでした。これよりも前の分科会で調べたことは理論上問題となることであり、実際にある経済体制が社会に当てはめられた時に問題となることとは異なるのではないかと、つまり理論と現実を比較することによって何か新しい視点が生まれるのではないかとという仮定のもと進めたのですが、実際に異なっていることはほとんどなく、この方向性での議論は諦めざるを得ませんでした。結果的には一回の分科会が無駄となってしまい、さらに次にディスカッションを進めていく一手が見当たらない状況に陥ってしまい、メイン ST も終わってファイナルフォーラムも近づく中、私としてはかなり焦っていました。

#### ◆ 分科会 7【オープンテーブル】

オープンテーブルでは①今までの概要を他のテーブルに伝える②資本主義がどのように自分たちのテーブルトピックと関わっているのか考えてもらう③さらに絞って考える、という内容を考えていたのですが、他のテーブルも同じような質問をしていたので、私がいたグループでは各テーブルに対する質問を即興で考えて聞くということを行いました。しかし、ここから自分たちの議論にとって役に立つような意見を収集することは難しく、他のグループも同じような状況で、せっかくのオープンテーブルを有効活用することは残念ながらできませんでした（ここではオープンテーブルについての反省は割愛させていただきます）。その後オープンテーブルの内容を共有したのち、ファイナルフォーラムでどのような発表を行うのかについて話し合いましたが、全員が納得のいけるような骨子は完成しませんでした。夜にファイナルフォーラムの構想を考えてくることがちょっとした宿題としました。

#### ◆ 分科会 8【ファイナルフォーラムに向けて】

まず初めにファイナルフォーラムでの発表の構想を話し合いました。一晩考えた案をみんなで報告をしたのですが、結果的に私が出した、SDGs を絡める案でまとまりました。つまり、資本主義の最大の問題点を利潤追求の精神とし、そこから脱却するための手立てとして SDGs があると考えました。現在国連肝入りのプロジェクトである SDGs ですが当然何か穴ないし欠陥があるはずであると考え、ファイナルフォーラムにおける発表として、①資本主義に関する導入②SDGs の導入とその批判③現代の資本主義社会において、どのようにすれば SDGs を効率的に当てはめることができるのか、という3つの軸を据えて議論することに決定しました。本当は事前準備の段階でここまで絞っておく必要があったのではと反省していますが、兎にも角にもここでようやく議論の方向性が見え、私を含め参加者にも安堵の表情が浮かんだような気がしました。

#### ◆ 分科会 9【SDGs】

以上の話し合いを元に SDGs に関する簡単な調査を行いました。急に SDGs という単語が出てきたため戸惑っている参加者も中にはいましたが、動画や文献などをベースに SDGs の長所・短所を探りました。いくつか問題点が出てくる中で、①個別の目標を見た時に矛盾している点が存在する②考慮すべき問題の欠落③目標が野心的であるがゆえに個人のレベルでの取り組みが難しく感じてしまう、ということに主に絞ることにしました。

#### ◆ 分科会 10【グループワーク】

洗い出した問題点も参考にしながら、現代の資本主義社会のなかでどのようにすれば SDGs を十分に適用していけば良いのかということにディスカッションは進みました。最初はテーブル全体で話し合っていたのですが、なかなかまとまらず、かつ前の分科会で話し合った SDGs の問題点にあまりにも固執してしまったことも原因となり、議論がなかなか活発にならず、本当にファイナルフォーラムまでにまとまるのか不安になりました。参加者の側から小さなグループに分かれて話し合いたいという意見も出たので、最後の1時間くらいで3つのグループに分かれてファイナルフォーラムで行う提言について話し合いを進めました。そのなかで出てきた案が幸いにも経済的・社会的・政治的観点から出てきた提案であったため、次の分科会で小グループに分かれてさらに議論を深めようとなりました。

#### ◆ 分科会 11【提言に向けて】

この分科会では最初からグループに分かれて議論を深め、それを共有しました。内容としては、①GDP を置き換える新たな包括的な指標としての GNWI (Gross National Wellbeing Index)、②SDGs を個人レベルまで落とし込んだ iSDGs、③企業からの政治資金のフローを抑制することで特定大企業の有利となるような政策の施行を止める、といったことです。GNWI とは GDP から環境負荷・人間に与えた損失・その他のエラーを引いたもの、そして iSDGs は、具体例をあげるとすると、極度の貧困は一人が一年に\$2 寄付をすれば解決できるとした内容を取り上げました。当然穴のある提言ではありますが、これらを通じて SDGs をより生活に浸透させていくことで、金だけではなくその他の価値（環境や働きがいなど）にも目を向ける土台を作れると考えました。

#### ◆ 分科会 12【ファイナルフォーラムの準備】

分科会 11 から 12 にかけては、プレゼンターを五人決定して発表者が原稿を作り、その五人を手助けする補佐役がついて情報を調べたりパワーポイントを作成したりしました。ギリギリになってしまったということもありますが、発表する人以外のすることがなくなるということもなく、最後までチーム一丸となってファイナルフォーラムに向けて取り組むことができたと思います。



## 国内参加者からの声

Table4 早稲田大学 1年 王安棣

To me, attending 63rd international student conference is a milestone. Before the conference, I did not have a chance to look into a topic in such depth and with so much effort. Spending nine days focusing on one single problem was new to me. It was with no doubt tiring, but at the same time enjoyable and meaningful. Here, I would like to share several skills I gained in the conference, including critical thinking, idea linking and concluding. My table topic 'reconsidering capitalism' is an essential topic embedded in modern society. As a person lived under a capitalist system and benefited from it, it was at first hard for me to criticize capitalism comprehensively. The bias inside my heart shadows me from giving a true insight. My table members helped me overcome this bias by sharing their stories. By understanding their personal experiences, it became easier for me to think what they think and shift my position to give a full and concrete opinion.

As the discussion heated up, every table member came up with new ideas. Every thought had their own points, yet they were not yet well organized. With too many different ideas, it was hard to keep the flow of discussion smooth. To solve this problem, my table chef showed us how to relate ideas. Ideas can be combined, whether as comparison or resemblance. By mimicking his mean, I found myself better at linking the dots. I also gained a better understanding of the discussion since with the lines made by dots, I could portray the true shape of the whole discussion.

When the discussion came to the end, it needed to be concluded concisely. The logic behind needed to be proved concrete. The solution it gave needed to be shown practical. This tough task was scary at first glance. However, we still reach the goal by cooperation. Not only focusing on their own parts, all table members helped one another to get persuasive evidence for the statement, and inspect any missing parts others had. That was why our table could present a clear and concrete conclusion with the creative solution.

In my future journey, I know these crucial skills will be with me wherever I go. Every time I apply them, I will be brought back to the conference that I spent nine days on. I will recall all the details of our discussion: the happiness of coming up with new ideas, the confusion when the discussion going around in circles and the proudness when the conclusion was finally made. Then, there will be a fearless smile on my face and the strength from my heart. Because I know, no matter what the future may be, with what I had achieved in ISC, everything is achievable.

## 海外参加者からの声

Table4 Emily Naomi Okabe (U.S.A.)

I believe that ISC is a place where students, regardless of their background, culture, religion, and language, come together with the same determination to change the world into a better place. By working together towards the same goals, we are able to unite and achieve a level of understanding and respect that cannot be achieved in any other environment. This year, students from 19 different countries and regions gathered to attend this conference. Although the majority of people will give up on trying to change the current situation of the world, the delegates that gathered at ISC were those with the conviction to take the first steps in realizing a new global movement. As one of the student speakers said, “you don’t have to travel the world, because the world is coming to this conference”. For 10 days, we have gathered our wisdom in an attempt to create solutions and ideas against crucial issues that the world is facing today.

Our current world is now experiencing chaos and uncertainty. These problems include corruption, environmental issues, refugee crisis, poverty, and gender inequality. And these are just some of the topics that the International Student Conference discussed about. However, when we think deep down into the core cause of these issues, we realize that a single factor may be responsible. And that is capitalism. Through heated discussions and debates, my table sought to uncover the underlying truths and aspects of capitalism that people tend to overlook. Capitalism has worked relatively well and helped humanity progress into the current world we have today. However, as mentioned above, not all outcomes were positive. Although the system itself may not be entirely wrong, it is the profit-seeking mindset of society that has created the problems we are experiencing today. We have come to a new age where we must value and protect the lives and world that our great-great grandchildren will live in. This is why the United Nations came up with the Sustainable Development Goals (SDGs). All nations in the United Nations are encouraged to fit these goals into their agendas, so that we can achieve a better world by 2020. However, my table realized that the movement towards achieving the SDGs are somewhat contradicting the natural drive of capitalism. My table successfully came up with 3 proposals that may shift our mindsets. Although we were unable to come up with a concrete solution to the many problems concerning capitalism, my table members will continue to search for better options and solutions. I believe that I was able to gain a better insight about the world we live in, which will definitely help guide my initiatives in the future.

My experiences at the International Student Conference have allowed me to realize the

importance of international exchange and dialogue. For me, ISC is a platform to create everlasting friendships throughout the world. This conference has reaffirmed my belief that even though cultural and language barriers may create walls in the beginning, friendship can overcome all differences. Through having dialogue and overcoming struggles together, we are able to realize the importance of recognizing the many differences and treasuring diversity as a means of improving ourselves. I am extremely grateful for being given the chance to attend such a life-changing event. I am grateful too all the wonderful encounters and friendships I was able to make during this conference. I am convinced that it is through the hearts and action by the youth that can create a great change to end all human sufferings.

Although years later, we may not remember all the details about what we did during the conference, we will surely remember the reason and purpose for why we gathered. I am convinced that this will give us the power and renew our individual determinations to think about what is necessary in this world, and what actions we as individuals can make in order to make the world into a better place. As my favorite philosopher once said, “A great revolution in just one single individual will help achieve a change in the destiny of a nation, and further, will enable a change in the destiny of all humankind”. The future is not to be waited on, but to be created. The dreams and ideas of a single individual will undoubtedly act as the driving force necessary in order to create the change that is needed. We, as future global leaders, must stand up and realize our individual potentials and lead the steps towards a global revolution.

## Table5

### International Relations in the Trump Era

#### ～トランプ大統領時代の国際関係～

テーブルチーフ Zhang Yinghan

#### テーマを選んだ背景

トランプ時代の国際関係を扱う予定でしたが、時間の都合上北朝鮮問題に焦点をしばらくこみましました。トランプの米大統領就任を受けて、国際社会には激震が走っている中、北朝鮮問題は、北朝鮮の度重なるミサイル試射の成功により国際社会の関心を寄せています。膠着状態に見えつつも、トランプ大統領の特性を勘案した上、未知の要因が生じる際に国際関係に大きな変化が生じる可能性は否めないのではないのでしょうか。本テーブルでは、未知の要因に関して3つのシナリオを挙げ、その際の国際関係の変化を予測しました。なお、必要に応じて、なぜその未知の要因が現在発生していないかも説明しました。会議の成果が国際関係を分析するときの一助になれば幸甚です。

#### テーブル全体の様子

国際関係に関するディスカッションをする際に、多様性が望ましいですが、今回は幸いなことに、日本、中国（僕自身）、ブルガリア、インド（長年フィリピンに住んでいる）、インドネシア、ロシアからの参加者を集めることができました。そのおかげで、参加者はそれぞれの出身やバックグラウンドに照らし合わせての話や、自国や自分の操る言語の新聞紙の報道内容を教え合い、大変目新しく面白い意見が一週間を通して飛び交っていました。無論、ディスカッション自体は非常に活発に行われ、テーブルチーフをやった甲斐が十分にあったなとほほえましく思えます。

#### ティーチをして学んだこと・気づいたこと

最初にこのテーマを設定したのは僕自身ですが、参加者の意見を聞き入れながら互いに出身、バックグラウンド、また持っている知識を十分に生かすことのできるテーマにいたしました。チーフには長、首領といった意味がありますが、それは決してすべてを自分で決めて参加者を自分の定めた目標に引っ張ればいわけではありません。参加者それぞれの特性を考えに入れ、なるたけ内に秘めたポテンシャルを引き出そうとすると同時に、しびれを切らし参加者の主体性を無視し、例えば性急に答えを提供するようなことのないように万全の注意を払わなければならないでしょう。それはひとえにティーチのやりにくいところであり、醍醐味でもあるでありました。



## 分科会 Diary

### ◆ 一つ目のシナリオ

#### 【金正恩の急死による北朝鮮指導者の非自然的な交代（権力争い）】

現在の北朝鮮の指導者こと金正恩は 33 歳で、身体に異常はないように考えられますが、肥満による健康被害や暗殺される可能性を考えれば、急死することは十分考えられます。彼の家族を調べれば、息子がいないことがわかりました。そのため、後継者となりうるのは、妹の金與正と殺された兄の息子の金漢率だと考えられます。しかし、いずれも後継者になるためには政治家や高官の支持を集めなければなりません。

ことさら金與正に関しては、いままで女性の指導者がいなかったもので、政界の人のみならず、民衆にも抵抗があると思われる。よって、今までの指導者のように辛辣な手腕、恐怖政治を用いて政治基盤を固める力があるか否か、それが試されると考えました。仮にその能力に欠けていれば、政治家や高官の力を借りることになるでしょう。その際にこそ、財政界の有力者に密な関係にある中国やロシアが自分の力を発揮し北朝鮮の政治状況が自国に有利になるように努めると思います。無論、アメリカもこの隙を看過するわけにはいきません。おおよそ、中国・ロシア対米国陣営か、中国対ロシア対米国陣営になるかと考えました。もっとも、北朝鮮と最も親密な関係にある中国は、一躍していままで微妙に維持されているパワーバランスを崩す可能性が十分高いため、ロシアが中国と完全に団結するのではなく、 balanサーとして状況をアメリカにも中国にも有利すぎないように工夫するのではないかと考えられます。その際、アメリカよりは、アメリカの確固たる同盟国でありながらロシアと良好な関係を保っている日本との連携が考えられます。

金漢率の場合、父は金正恩の命令を受けたものに暗殺されたふしがあり、おそらく金政権のみならず、北朝鮮の政治体制もが憎たらしいと思っているのではないのでしょうか。したがって、彼は仮に金正恩の急死後北朝鮮に戻れば米国を味方に引き入れることにより指導者になろうとすると考えられます。それが成功すれば北朝鮮に政治体制の大きな変革（自由民主化）が訪れるかもしれせん。

### ◆ 二つ目のシナリオ

#### 【米国による北朝鮮に経済援助を与える企業（国有のそれを含めて）に対する制裁】

北朝鮮は、自らが米国を筆頭とする資本主義陣営に対抗できるようにしようと思えば、軍事開発に専念するのみである、といった先軍政治を実践しています。そのため、国内総生産（GDP）の四分の一を軍事開発に供しています。しかし、それでも不足しているため、中国やロシアによる経済援助を受けている状況です。したがって、アメリカやその同盟国の北朝鮮に対する直接的な経済制裁はさほど功を奏していません。もっとも、近日アメリカは、中国およびロシアの北朝鮮に経済援助をしている民間企業を制裁することに決めました。大方の援助は国営企業（中国やロシアのそれ）がしているため抜本策とは言えませんが、場合によっては（北朝鮮問題のさらな

るエスカレート、アメリカ国内に起きている問題から矛先を転じたいトランプの企てなど）国営企業に対する制裁も考えられます。無論、その場合、米中米ロ関係の悪化のみならず、米国経済の悪化をも懸念せざるをえないですが、トランプ大統領の特性を鑑みれば可能性は高くは低いでしょう。さて、そのような制裁が課されたシナリオについて考えました。

北朝鮮は中国やロシアからの援助を断たれば、莫大な経済力を基礎とした先軍政治が難航します。その場合、北朝鮮は核兵器を含めた大量破壊兵器の開発が滞るため、アメリカへの抑制効果が弱まり、アメリカは北朝鮮に対してより強固な政策（軍事行動、韓国と統一するように根回ししたり促したりすることなど）を取ることができるとでしょう。しかし、その制裁は軍事開発のみならず、民生にも響きます。それは中国への難民流出や韓国に統一されることの可能性が高まることを意味するので、中国もロシアもそれを見過ごすわけにはいきません。二つ目のシナリオは、突きつめて言えば、今まで北朝鮮が事実上中露に支持された先軍政治を駆逐することでできたパワーバランスが崩れた場合です。それはつまり、米国陣営対北朝鮮、中露陣営の直接的な衝突であり、米中米ロ関係の著しい悪化は必至です。米中ロそれぞれの指導者が北朝鮮を重視する度合いによっては、戦争に至る可能性もないことはありません。無論、その反面、米中米ロ間の良好な経済関係も互いにとって肝要だと考えられます。ことさらアメリカに関しては民主国家のため、経済の悪化に国民が猛反発すれば、大統領とはいえども、権限が無限にあるわけではありませんし、それを考慮せざるをえません。そのため、制裁が続く可能性は低いといえます。しかし、仮に制裁が長期的に続けば、米中米ロ間には再び冷戦が訪れるかもしれません。

#### ◆三つ目のシナリオ

##### 【米国の圧倒的な技術的優位の獲得】

現状において、北朝鮮もアメリカも核兵器といった大量破壊兵器を所持しており、それにより互いに牽制しあっているといえますが、仮に片方、おそらくアメリカの可能性が高いですが、圧倒的な技術的優位を獲得することができ、もはや北朝鮮に核兵器などの大量破壊兵器を駆使されることを恐れない場合を考えました。その場合、アメリカは北朝鮮に対して、「飴と鞭」のような政策をとることになるかもしれません。「鞭」とは、強固な政策で二つ目のシナリオにてすでに述べましたが、「飴」とは優遇政策で、例えば六者会合を再開して北朝鮮の非核化を条件に、人道的支援や最恵国待遇を与えることです。無論、「飴」と「鞭」の割合は北朝鮮の指導者の示す態度に大きく関係することは言を俟ちません。北朝鮮が協力的であれば、アメリカは主導権を握るようになり、中国やロシアに関しては北朝鮮がアメリカに接近することは望まないですが、表向きに北朝鮮の非核化を支持しているので、二つ目のシナリオに比べて、比較的受動的な立場になると考えられます。北朝鮮が非協力的な場合、アメリカは強固な政策をとる一方、中露は秘密裡に物資、金銭援助を続けようとするでしょう。二つ目のシナリオに比べて、中露は直接的に制裁を受けているわけではなく、かつ北朝鮮の非核化を支持しているので、やはり対米関係が悪化し、米国との駆け引きで受動的な立場に陥るという結論に至りました。

#### ◆ まとめ

以上に挙げた三つの未知の要因とも、発生する確率は高くありませんが、一旦発生すれば北朝鮮問題が大きな転機を迎えることは周知でしょう。ただし、人類の歴史は、発生する前に誰も思いつくことのなかった未知の要因に大きく狂わされ、誰も思わぬ方向に転じる例は列挙をいとみません。そのため、トランプ米大統領や現在の北朝鮮情勢に照らし合わせつつ、あくまで可能性は低いですが、未知の要因が発生したシナリオの分析は大変有意義と考えます。また、このような分析が北朝鮮問題を考察する際の斬新な切口となるように切に願ってやみません。

#### ◆ 補論

##### 【国際社会全体に望ましい、ひいては SDGs の実現に資するようなシナリオ】

金政権は国民の支持を得るために、長年個人崇拜や恐怖政治を駆使してきました。北朝鮮の国民は一見完全に手なずけられて従順にその指導に従っているように見えますが、果たしてそれは実情なのでしょうか。または、仮に一部の人が完全に心服しているとしても、それはいつまで続くのでしょうか。北朝鮮の指導者は、国民に「我が国が一番よい。ほかの国は塗炭の苦しみを味わっている」といった洗脳教育をしています。そのような真っ赤な嘘は外部との連絡ができたたん、あっけなく露見すると思われます。例えば、現に北朝鮮指導者の凶暴な行動を暴くビデオの入っているメモリーが中国から北朝鮮に密輸されて、それが闇市場で高い値段で売買されています。そういったことによって、少しずつではありながら、北朝鮮の国民は指導者の凶暴さ、凶悪さ、嘘、虚偽に気付き始めるであろう。そして、いつか機運が熟して（ほぼ国民全員が気付いている段階）かつ圧政が弱まれば（急死による権力争いなど）、フランス革命に似たような革命戦争が勃発することは十分にありえると考えます。そうなれば、長年先軍政治に苦しめられた国民はそれに終止符を打つかも知れません。仮に北朝鮮が非核化すれば、それは真の意味で世界平和に資する大きな一歩です。なぜなら、それは他国に軍備競争をするインセンティブ、及び行う口実を削ることになるだけでなく、それより重要なのは、現行の国際秩序が守られ各国がより理性を持って交渉することやより建設的な議論ができることでしょう。今まで北朝鮮の指導者は、国際秩序を守ろうとしないと多くの国が受け止めていて（少なくとも表面上）、そのため、北朝鮮がいざとなるときに極めて予想外なことをするのではないかと恐れて、それに基づいての布石を打っています。また、北朝鮮の存在にかこつけて、国際平和を損なう恐れのある政策をとっています。そのようなアウト라이어がなくなれば、各国はもはやそのようなことができないのではないのでしょうか。そのような日の到来を、心より切に願ってやみません（国内革命以外の手段もちろん構わない）。



Throughout the nine days of International Student Conference 63, I was able to not only grow but also realize my limits. It was my first time participating in a program like this where students from all over the world gathered in one place and stayed together for over a week. This diversity did not just exist within the international participants but was also evident in the domestic/Japanese participants as well that were gathered from many different parts of Japan. There were returnees from abroad who had lived in countries other than Japan, people that were born and raised in Japan etc. Additionally, there were international participants that were living in countries other than the one they grew up in. International Student Conference 63 was truly a platform full of diversity and this greatly influenced my experiences in not only the table discussions but also in daily conversations as well.

My table, table 5, consisted of four domestic/Japanese participants and four international participants and this diversity led to fruitful discussions. The topic that we discussed was International Relations in the Trump Era and we focused on North Korea. There were people who came from countries that were not as concerned about the issue as Japan, such as Bulgaria and we discovered that the way it is portrayed by the media is vastly different. In Japan, it is big news and this topic garners a lot of attention, therefore, we see a lot of media coverage on it. It is also widely talked about in Bulgaria as well, however, the difference is that because Bulgaria is not as threatened by this as Japan, it is covered by the Bulgarian media in a relatively unbiased and factual way. On the other hand, Japan takes a clear stance regarding this issue and because it greatly concerns Japan, it goes beyond the factual level. This discussion and finding made me realize that international relations is about the international community and the relationship between many different countries, therefore, it is important to have different perspectives on the table while discussing this topic.

In this conference, I was able to gain awareness of the fact that there is no “normal”. I have been living in Japan for a couple of years and the environment around me has become normative. However, the international participants with various backgrounds would question and criticize this environment that I am so accustomed to and this made me realize the importance of always staying critical and questioning your surroundings.

Additionally, during daily conversations with the international participants, topics that would not normally come up in Japanese conversations such as religion would come up. In Japan, there are not many religious people, therefore, this topic is not talked about very much.

However, in other countries where there are a lot of religious people and different religions, this is a much more talked about topic and the conversations could become heated as well. Depending on your background, even the topic of daily conversations could differ, and International Student Conference 63 was a place for me to learn different perspectives and become aware of the importance of talking to people with different backgrounds.

The diversity in International Student Conference 63 allowed me to think outside the box and reconsider the importance of interacting with people that have different perspectives. These different perspectives allowed me to grow and become more open-minded. Additionally, I was also able to realize how limited my thoughts were and the importance of incorporating different thoughts and perspectives. This conference gave me the opportunity to place myself in a diverse environment and I would like to continue to challenge myself by exposing myself to different perspectives.

## 海外参加者からの声

Table5 Natish Singh Bassi (India)

As an International Relations Graduate, seeing Table 5 in the official handbook with the topic: “International Relations in the Trump Era” just got me quite interested as it is very relevant in today’s time; we all need to discuss this topic much more, as we know that the decisions and the actions of the United States within the international community has the potential to change things, may it be good or bad; and with the presidential seat now given to Trump, it is like we are in a boat with a unpredictable mad man as a captain.

The discussion about IR in the Trump Era led us to focusing on the North Korean missile crisis, at first believing that Nuclear Warheads are the ones we all should look out for, where in fact, we should be worried about the “weapons of mass destruction” such as Biological, Chemical and Nuclear weapons that the North Koreans currently have and because of the “Songun Policy” or the “military first” policy their weapons stockpile grows every year.

We are led to believe that one country is worthy enough to be feared when it has acquired Nuclear Weapons, but I do not think so, Nuclear Weapons can only do damage within a specific amount of range, with only a percentage of the population affected. plus, the missile itself can be intercepted hence we have the US and its nuclear umbrella; whereas when we are faced with a biologically engineered weapon that is placed within a missile,

things can get quite worse even if the missile is intercepted.

This biologically engineered weapon can be an airborne virus that is designed to do much more damage than what Nuclear Weapons or triple what normal airborne diseases can do, with an airborne disease capable enough not only to destroy the population of one country, but the rest of the world, we are faced with a global widespread of this airborne disease and governments around the world will have a short amount of time to counter such a virus or attack.

In order to prevent this, the UN normally imposes heavy sanctions to North Korea to cripple its economy and stop or slow the development of these weapons. Yes, sanctions might slow down weapons development and cripple their economy as well but these sanctions do not do much good for the people themselves and as what Choi Ha-young, chairman of the Love North Korean Children Charity, said:

*“Currently, due to the UN sanctions, people in the lowest class are really impacted.”*

And with the recent sanctions imposed, I fear it only added more problems to the people and not much for the government as they ( the regime) always will get away with it and continue on developing their weapons.

With this, I suggest following what the US had done in the Cuban Missile crisis: Naval Blockades and Economic Embargoes. Simply put, having the Navy block the access routes of the Russian and Chinese Supply ships to North Korea, mostly consisting of Oil, Coal and food supplies, will surely cripple the Kim Jong Un’s regime and leave Russia and China with no options as they cannot afford to have a war against the west. Yes, it will increase tensions within the region drastically but I believe China or Russia will not make the first move for war, only will they participate in a war if the US attacks first and they will not aid North Korea if it (North Korea) attacks the US first. This then will open an opportunity for the west and its allies to send in only food supplies to maintain the people and to make a statement that the west does not want war, and only wants the regime to give up its weapons. With the Regime dried out of supplies, it will force itself to give up and only then will the Blockades be lifted if North Korea cooperates with giving up its weapons.

#### On Achievement(s):

Honestly, I never really had much courage to do public speaking because of anxiety issues (even though I really like it), as I tend to worry about the words I’m supposed or about to use (especially if it’s in an international event) but ISC63 just changed that, the moment I

knew our group had problems, and that the opening presenter had to back out because of a personal issue, I decided to step in and just do it not for myself but for the sake of the group and that alone just changed how I usually feel about public speaking and with the amount of encouragement I have received from the people I'm working with, was just enough for me to gather all the strength to just do it on the final day and everything was worth it. Now, I feel like I'm even more open to doing more public speaking in the future.

Conclusion:

The events that happened during the whole duration of the 63<sup>rd</sup> of ISC was probably the most amazing thing that I have ever experienced throughout all the International Programs I have been to so far, as I have never seen such a professional level of outcome from all the participants and committee members alike; that being with all of them at the same time improved not only myself but also widened my thirst for knowledge.



## 各プログラム報告

### 開会式

本会議がはじまる最初のプログラムである開会式は、参加者全員が初めて顔を合わせる場となりました。2名の国内参加者が司会を務め、実行委員長による本会議開会挨拶、ベトナム、ハイチから来た海外参加者2名と国内参加者1名による熱い代表挨拶が行われました。各々の本会議に向けた心境、意気込みに会場全体が熱くなり、最後には全員からの鳴り止まない拍手を経て、第63回国際学生会議が始まりました。



### ANA 機内食工場見学

8月22日(火)14:00~16:00にかけて、ANA(全日本空輸)様のご協力を賜り川崎にある機内食工場見学をさせていただきました。メンバー一同、飛行機に乗った経験は多くありますが、そこで出てくる機内食がどういった過程で製造・運搬されているのかを見たものはおらず、非常に新鮮な体験となりました。具体的な内容といたしましては、最初に担当の方から簡単に工場についての説明を受け、その後に1班9人ほどの班に分かれて見学、最後に振り返りの意味も込めたDVD視聴という流れでした。見学においては全身に着用物をつけ、手洗いの際にもただ洗うだけでなく段階を踏んで行うといった徹底した安全管理の姿勢を感じることができました。また、プログラムは日本語で行われたため海外の学生に向けて日本人が翻訳を行いました。難しい単語も多く訳せないところもありました。そういった意味でも学びにつながりました。改めて、多大なるご

尽力をいただきましたANA様に感謝の意を表します。



## 本会議研修旅行

国際学生会議では、Tokyo Main Study Tour (以下 Main ST) という研修旅行を本会議中に開催しました。各 6 グループに別れ、運営委員が東京・神奈川観光を行い、参加者を引率しました。今回は、湘南や浅草、渋谷等様々な町や都市に赴き、習字などの文化体験を経験したり、日本の伝統料理などを美味しく頂きました。本会議では各テーブルに別れてディスカッションをしているため、普段は話せないような参加者たち同士で一緒に行動する機会となりました。この Main ST 通して、参加者は非常にリラックスした時間を過ごすことができました。



## レクリエーション

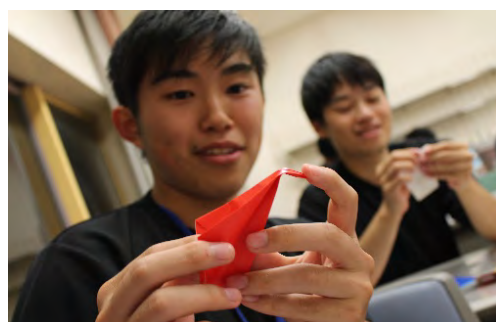
国際学生会議では、本会議の間にレクリエーションの時間を設け、二つのゲームを通して、参加者同士のより深い交流を図りました。また、レクリエーションは本会議の議論で精神的、肉体的に疲労している参加者たちにリラックスした時間を過ごしてもらおうといった目的もありました。一つ目はクイズ形式のゲームで、二つ目はボックス内にあるものを手で触るだけでそれが何かを当てる“ブラックボックス”と呼ばれるゲームを行いました。6 チームは優勝賞品を目指し、各ゲームを楽しんでいました。各チームとも非常に白熱し、参加者、運営委員全員はより一層絆を深めることができました。



## 日本文化体験

8月25日(金)18:30~21:00には、日本文化体験を行いました。今年はソーラン節と折り紙の2つを選定し、それぞれの道で活躍されている講師の方をお招きしました。ソーラン節に関しては「極め組 東京」様にお越しいただき踊りの歴史の説明、その後にダンス指導を行っていただきました。折り紙では江戸末期創業である「おりがみ会館」様から講師をお招きしご指導賜りました。どちらも体験時間は1時間と短いものでしたが、講師の方々の指導力のおかげで参加者一同大変満足しておりました。また、今年の指導は日本語で行われたので通訳を日本人参加者の有志に行ってもらいました。みな通訳として訳すだけでなく事前に原稿を作り、練習をするなどの取り組みを実施しておりました。一例をあげればソーラン節の通訳は事前に練習をしすぎて筋肉痛を起こすぐらいでした。そうした積極的参加のもと実りある体験となりました。

ご協力をいただきました極め組東京様、おりがみ会館様、また身内ではありますが通訳の方々、改めて感謝の意を表します。



## ファイナルフォーラム(成果発表会)

国際学生会議では本会議の中で話し合った成果を一般に発信する場として、ファイナルフォーラム(以下FF)を開催いたしました。本FFではUNDP駐日代表の近藤哲生様を招聘して、基調講演をして頂きました。ユースの意識改革が持続可能な社会を実現するために大事なことであるという講演は、ISC63の参加者だけでなく観覧者にとっても将来を考えさせられるものとなりました。また今年、15分間の各テーブルの発表後に参加者と観覧者との2wayコミュニケーションを目的とした交流企画を設けました。交流企画では、そのトピックへの質問やISC63の活動内容についてなど、興味のあることを参加者に直接聞くことのできる機会となりました。また本FFでは約100名の方にご来場いただきました。この場をお借りして感謝を述べさせていただきます。



## ウェルカム・フェアウェルパーティー

8月20日(日)にウェルカムパーティーを新宿のサムラート新宿で、8月27日(日)にはフェアウェルパーティーを同じく新宿のParty Space Aceで行いました。

ウェルカムパーティーについては、まだお互いに出会って1日ほどしか経っていない中でしたが非常に盛り上がっていました。これから本会議をスタートさせる上で参加者のパワフルさを感じる事が出来ましたので、良いスタートが切れたと考えております。



一方のフェアウェルパーティーはもう知り合った状況でしたので、盛り上がりは予想しておりましたが、私の想像を超えるものを見せ1週間で培った絆の強さを感じることができました。特に今年はパーティーから3日後に誕生日を迎えた海外参加者がいたため誕生日パーティーを行いました、こちらも盛り上がりを見せていました。両パーティーともに無事に開催・終了することができて思い出に残るものとなりました。

## 閉会式

閉会式も開会式同様、国内参加者2名が司会を務め、実行委員長による閉会挨拶の後、バンラデシュ、インドネシアからの海外参加者2名と国内参加者1名による参加者代表挨拶が行われました。代表挨拶では一週間の思いが溢れ涙をこらえながら話す姿に、少しの間皆が感傷的になりました。国も言語も思想も価値観も異なる学生同士がお互いを理解し、心をついにできたと感じられた週間であると共に、皆でいられる最後の時間であることを強く感じていました。再開を固く約束し、第63回国際学生会議は幕を閉じました。



# 本年度の新たな取組

## オープンテーブル

### ◆概要

3 時間の一つの分科会を利用し、各トピックの参加者をそれぞれ均等に異なるテーブルに配置しました。そして各々のテーブルについて時間を設け参加者が自ら司会進行役を行い、異なるテーマの参加者に意見を共有し、論点を提示することで参加者同士が異なるトピックに対して議論を行い新しい意見を得る場です。

### ◆意義

きっかけは、一人のテーブルチーフの「違うテーブルの他国の学生と意見を共有したい」という一声でした。普段の分科会では同じテーマの参加者同士で話し合うため半ば議論の停滞や偏った意見が集まる可能性があります。そのためオープンテーブルを通し多国の様々な価値観や考え方をを持った参加者から意見を得ることにより停滞や偏った意見を防ぐ一つ的手段となればと考えたことがオープンテーブルを作成しました。

### ◆総括

今回のオープンテーブルでは、テーブルごとで論点を考ええいただき他のテーブルの参加者に向けて参加者自身がファシリテーターとして議論を作っていました。実際に行ってみると議論というよりはほかのテーブルの参加者から意見をもらう Q&A コーナーになってしまいましたがその後の議論に生かすことができ良かったと思います。

初の試みということもありまだまだ改善点が多々ありました。しかし参加者やテーブルチーフの声を聞いてみると、「たくさんの人の違った意見を聞いてよかった」、「来年も行うべき」という声が多く聞けました。是非来年も行っていただければ嬉しく思います。

私はテーブルマネジメントとして議論をより良いものにする立場でありましたが、方法は無数にあると思います。本年度はオープンテーブルという形で他の参加者からたくさんの意見をいただける場を設けましたが、来年度以降はより良い議論の場を作り出すためいろいろな議論方法を考えていただければより質の良い本会議になると考えます。

## 地方ファイナルフォーラム in 名古屋

国際学生会議では分科会で話し合った成果を一般に発信する場として、東京で Final Forum (以下 FF) を行います。しかし本年度、地方での FF を試みた経緯としましては、私はこの学生会議が約 1 週間の議論と東京で行われるたった 1 回の FF で終わることに勿体無さを感じていました。社会問題に対して他国の学生とともに真摯に議論を行った成果はもっとたくさんの人に知ってもらうべきであると考えたからです。

本年度の FF は、(株)レオパレス 21 様のお力添えにより、ホテルレオパレス名古屋の一室をお借りして、開催いたしました。今回初の試みということもありご来場者は約 15 名と少数ではありましたが、FF 来場者の方に今回の発表会を通じて各々の問題について知っていただき、そして考えていただける場となりました。まだまだ改善点はたくさんありますが、本年度の地方開催をきっかけに来年度、よりたくさんの方に知っていただける機会を作っていっていただけたら幸いです。

最後ではありますが、今回私達の地方開催に携わっていただきました(株)レオパレス 21 様をはじめとする多くの皆様に深く感謝の意を表しまして私からの総括といたします。



## 第 5 章 感想

2017年9月1日

## 第63回国際学生会議の成果発表会を受けて

経済人コー円卓会議日本委員会 専務理事兼事務局長

九州大学経済学府 客員教授

石田 寛

私は、不確実で不透明な時代（食糧難、テロ行為、北朝鮮の核実験など）の中で、資本主義の立ち位置や存在感がこれほどまで形骸化していくことに、とても危機感を持っています。資本主義が生み出した『負の遺産（格差社会）』をどのように解決に導く事ができるのか、この地球中に生きている人類一人ひとりが力を合わせて、真剣に考え、実行していかなくてはならない時代になってきています。

こうした中で、第63回国際学生会議では、松本実行委員長の強いリーダーシップのもとで、自主的に同じ志を持つ人々が日本だけではなく、世界19カ国から総勢41名が集い、「Endeavors in Diversity – Go forward and beyond the cultural internationalization」という総合テーマを設定し、以下の5つのテーブル（1. 貧困の女性化、2. 機械と人間のあり方、3. 気候変動、4. 資本主義の再考、5. トランプ大統領時代における国際関係）について7日間熱い議論を交わしてきました。

私は、未来を担う若い世代が、お互いに価値観を共有しながら、社会的課題を解決していくためにどうすべき、認識を深めたり、対策を講じることができないか真剣に考えていくことに強く共感しました。

各テーブルの成果発表（8月27日）を聞き、いくつか感じたことをコメントします。

- ・参加されたメンバー同志が、短期間にこれだけのアウトプットを成し遂げる一つの要因には、おそらくお互いの強い絆、信頼関係を醸成できたことを証明していると、強く感じました。
- ・各テーブルの発表内容は、いずれも自分ごと化した形で、各自がしっかりとその内容の本質を追求し、そこから何をすべきか真剣に考え抜いたものであることが発表を聞いて伺い知ることができました。
- ・次に自分たちがどういった取り組みをすることができるのかアクションに結びつけたテーブルとそうでなかったテーブルとに分かれていましたが、できれば小さなことでも良いので何か具体的な活動に結びつけるようにできると良いと思いました。



物事の本質を見極める「心の目」を養うためには、一人ひとりが客観性を保持し、普遍的に真理を追究することを心がけていくことが肝要ではないでしょうか？そのためには、「自分を知り、他者を知り、世界を知ること。そして世界から自分の立ち位置を見極めること」だと私は常日頃から思っています。

各テーブルの成果発表をお聞きして、多様な価値観の中で多面的に議論し、各テーブルチームが四苦八苦しながらかちんと纏めたことに敬意を評します。皆さまがこの限られた時間内で議論を纏めてきた苦労は、決してお金を払っても買えるものではないですし、これからの人生においても、大変貴重な体験をされたと確信しています。

最後になりますが、私はいつも以下のことを念頭に置きながら行動していますので、ぜひ皆様と共有させてください。

- ・ 自分を知り、他者を知り、そして世界を知ることができるか？
- ・ 指示待ち型人間から脱却し、提案指図型人間へ脱皮できるか？
- ・ 自由自在に発想を変えて、多面的な切り口で物事の本質を見抜けるか？
- ・ ぶれない判断軸を持ちながら、決断できるか？
- ・ 自らが課題の抽出、何をすべきか理解し、行動・実践できるか？
- ・ 自分自身で自らのあるべき姿を磨き上げていくことができるのか？
- ・ 世界観の中で、自らの立ち位置を把握しているか？
- ・ 多様な価値観の中で、持論形成ができるか？

そして、自らの信念は、“自らを正し、誰が正しいではなく、何が正しいか”であります。

これからも皆さまお一人ひとりが平和な社会秩序が構築していくことの重要性を念頭におきながら、自らの道を切り開いていくパイオニア精神を持ち続けていくことを祈念しております。

以上

## 第 6 章 協賛・後援

スポンサー

クラウドファンディング支持者様

## スポンサー

### 主催

日本国際学生協会

### 助成

国際教育振興会

公益財団法人平和中島財団

公益財団法人三菱 UFJ 財団

独立行政法人国際交流基金

一般財団法人アジア国際支援財団

### 協賛

アビームコンサルティング株式会社

株式会社東京個別指導学院

株式会社 LocoBee

株式会社レオパレス 2 1

特定非営利活動法人キャリアクルーズ

株式会社ガイアックス

株式会社 DHC

### 後援

外務省

UNDP Tokyo

経済人コー円卓会議

一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク

一般社団法人グローバルイニシアチブ協会

JAPAN FOUNDATION  
国際交流基金



MUFJ 三菱UFJ国際財団



東京個別指導学院

Leopalace 21

DHC

Loco:Bee



外務省

The Ministry of Foreign Affairs of Japan



JAPAN CIVIL SOCIETY  
NETWORK ON  
SDGs  
SDGs 市民社会ネットワーク

CAUX ROUND TABLE  
経済人コー円卓会議日本委員会

## クラウドファンディング支持者様

松本聡司様

安藤昭太様

大野洋平様

藤澤將様

猪飼千博様

石田寛様

西恵正様

浜田かおり様

藤澤哲史様

吉岡伸輔様

堀龍一様

藤澤京子様

山永航太様

川原陸様

岩田和央様

明石怜子様

園田武史様

藪彰様

藤平智人様

岡本亜美様

内海貴啓様

猪飼喜代様

福澤めぐみ様

中村久美様

第 63 回国際学生会議は皆様の手厚いご支援により無事に開催することが出来ました。またこの他、13 名の方々にもご支援いただきました。

この場を借りて、皆様に御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 第 63 回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：松本 滉司

編集責任者：高階 空也

発行：日本国際学生協会 第 63 回国際学生会議実行委員会

〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学文化総部 I.S.A.





International Student Conference